
ヒーローズ・エンブレム

礎衣 織姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒーローズ・エンブレム

【Nコード】

N5395U

【作者名】

礎衣 織姫

【あらすじ】

容姿も頭も平均的な、フツメン河波斗かわなみといち一。生まれ育った街も平凡だったが、そこには宿敵とも思える、顔よし、スタイルよし、頭よしの完璧な三人組、佐藤海地さとうかいじ、真部李幸まなべりこう、坂本里奈さかもとりながいた。街のスーパースターである三人組に睨まれたら最後という、常識では考えられない街の風習に立ち向かう斗一だったが……

ゆいいつの味方かも知れないイケメン桜井享さくらいとおるも、大学進学のために上京。四面楚歌となった彼の春休みには、なにやら「普通じゃない」、不穏な空気が流れはじめていた。

春休みは危険の幕開け（前書き）

三人称をおもな文体として好む作者が、無謀にも挑戦する一人称です。なので、一人称として扱いやすそうなストーリーを題材としています。とにかく自信がないので、まさかの頓挫も……迷惑千万なのは承知のうえで投稿を決行。あらかじめご了承ください。＊更新も遅いです。ご注意ください。

春休みは危険の幕開け

「地味だけど、それなりにはイケてるんじゃない？」と言ってくれるのは母親だけ。彼女いない暦^{かわなみといち}〇年の数という、なんの取り柄もない男、河波斗一とは俺のことだ。

平均的な顔立ちで身長一七八センチ。運動神経は並。成績は真ん中ぐらいで、人からの印象は……特にないだろう。父親は中小企業サラリーマン。母親はパートタイマー。兄弟はいない。資格もない。貯金は二万五千円。

このたび、平凡な高校生から平凡な大学生へと転身を遂げるわけだが、それがどうした。極めて何事もない春休みだ。現在住んでいるところは都会ではないが、それほど田舎でもない市で、よくある街だ。そして平凡な俺には、非凡に片足突っ込んだ友人がいる。桜井^{さく}だ。

美形で、身長は一八〇センチ。運動神経抜群で成績も上位。人からの印象はカッコイイ&王子様だ。父親が社長で母親は専業主婦。兄弟はカワイイ妹が一人いる。資格は十個くらい持っているそうで、貯金までは知らないが金回りはいい。

イケメン桜井とは高校で知り合った。俺のような人間とつるもうというのだから、かなりの変わり者である。おのを引き立てるためだとしても変人だ。なぜそう思うかについては後ほど語るとして、桜井はノートを貸してくれたり、昼飯をおごってくれたり、なかなか役に立つ男だった。しかも「週末には女の子とカラオケ」なんていう特典までついてくるので、右に並ぶ者はない友達といえる。

「おまえ、大学どこ行くの？」

桜井は急に思い出したように質問をしてきた。卒業式の日の午後

である。卒業証書を片手に、うららかな日差しの中、校庭を歩いていた時のことだ。

「地元が決まってるんだろ」

と俺は答える。「っーか知らなかったのかよ、友達じゃないのか」と付け加えそうになるも、俺もヤツの行き先を知らなかったの言葉を飲み込んだ。

「よかったな、中くらいの頭でも入れる大学があつて」

桜井はのんきに言った。ちよつとグサツときたが、本気でバカにしていないのはわかる。ゆえに俺は頬を引きつらせながら、笑って答えた。

「悪かったな、能無し大学で。そういうオマエはどこだよ」

「T大」

アツサリ答えられたが、日本を代表すると言っても過言じゃない某有名大学だ。俺は一瞬だけ理解できずにポカンとした。

「え？ ひよつとして合格した？」

「あたりまえだろ」

なにが、あたりまえなものかよ。しかし……T大か。

「そっかあ、上京するんだな」

思わずしんみりしてしまった。そのせいか桜井も、しんみりとなつた。

「うん。逢えなくなるけど、ずっと友達でいてくれよな」

青春ドラマや少年向けアニメなどで、よく吐かれる台詞だ。テレビではジーンとくるのだが、現実で言われると恥ずかしさいっぱいになるのは、なぜだろう。

きつと前置きに熱い友情エピソードがないせいだな。ここで「なに言ってるんだよ！俺とおまえは死ぬまで友達さ！」とは返せない。唐突に盛り上がりすぎだし、クサすぎる。

俺はしどろもどろに応えた。

「う、あ、まあ、いいけど」

「なんだよ」

「なんかムズがゆい」

「そう言うなって。考えてみたら俺、おまえしか友達いないんだ」
「うえっ、嘘っ」

「ホント。ガールフレンドはいっぱいいるけど、男友達いなかった」
「充分じゃねえか。野郎フレンドなんか、ちよつといりゃいいんだよ。」

「そう思いつつも、俺は「女に囲まれてっからだ」と冗談半分に返してみた。すると桜井は「そうだな」とすんなり肯定した。
くっそー、ムカつく。」

「あのさ」

「あ？」

「これ、住所とケータイ番号。ケータイ新しいのに変えるんだ。メモアドも変わるから、よろしく」

メモ用紙を渡された。

本気で友達いないのか。常々うらやましいヤツだと思っていただけ、急に哀れに思えてきた。おまえの気持ちはよくわかるぞ。そう、友達なら俺もいない。それは胸張って言える！

「ちゃんとメール返信すつから」

「とか言ってみる。そこで突然、門前で女子団に前方をふさがれた。ざっと数えて九人ほどいる。」

「桜井くーん！ いまから打ち上げるんだけど、一緒に行かない？」

「きゃあ、言っちゃった！」

「キヤーキヤー」

「キヤーキヤー」

キヤーキヤーうるせえよ女子！ 俺も誘え！

そんなことを思っていると、桜井がチラッと俺の顔色をうかがった。

「斗ーも一緒にいいなら」

「ナイス！ ナイスフォローだ桜井！ あとは女子が嫌な顔をしま

せんようにと祈るだけ。まあ、たいていはOKだろう。さきほどの台詞から乙女たちは「桜井君は斗一が一緒でないなら行かない」と解釈したはず。これでいつも八割がた同行していた俺だ。いまさら却下はないだろう。

案の定、返事はこう返ってきた。

「いゝよゝ！ もっちらーん！」

やった！ それみる！ …… あ、でも金がない。

心配する俺をよそに、桜井はひょうひょうとしている。「さては持つてるな。あとで必ず返すから貸してくれ」と相談しようとした俺の気持ちもなおざりに、このあと桜井が吐いた台詞で、俺は心底冷えた。

「そつちが誘ったんだから、オゴリだよな？」

ぎえゝっ、割り勘だろ！ 割り勘！ それともアメリカンなのか！？ いくらおまえでも、それはブーイングだろ！

ところが女子団は、キャピキャピしながら盛り上がった。

「あたりまえじゃーん！ つきあってくれるなら私たちが出すよ」

桜井、おまえは神か。俺が言ったら絶対に袋叩きだぞ。「けっ、

誘ってやってんじゃんよ！」と言い返されること請け合いだ。

啞然としていると、桜井が俺の腕をつかんで引っ張った。

「ラッキーだったな。行こうぜ？」

男から見ても、さわやか好青年。

桜井よ、女友達がこれだけいれば、男友達はいらんぜよ。

そんな桜井も、春休み突入とともに上京した。今は部屋を片付けるので忙しいらしく、電話もメールもない。いや、一回だけ電話があった。周囲の喧噪？が受話器に入るので聞いてみれば、「女の子達が荷物開けるの手伝いに来てくれた」とのこと。

おいおい、もう女子に囲まれてるのかよ。

俺はバカらしくなって電話を切った。

「ヒマだなあ。歩いてくつか」

というわけで、近所をブラついた。住宅が並ぶ通りを大通りに向かってまっすぐだ。大通りへ出ると道路をはさんだ向こうにコンビニがある。自販機でジュースでも買って飲むか、とジーンスのポケットを探る。百五十円。

よっしゃ、買える。

小学生のように百五十円を握り締め、信号が変わるのを待っていると、なんか見たことのある三人組がコンビニから出てきた。

佐藤海地、さとうかいじ 真部李幸、まなべりこう 坂本里奈、さかもとりな

佐藤と真部は男で、里奈は女だ。幼稚園から中学校まで一緒だったが、それほど接点はない。なにしろこのトリオは最強。子供の頃から目立ちまくっていた。つまり俺とは正反対の人種だ。

佐藤は身長一八三センチのスポーツマンで、ごっついハンサム。真部は理数系のクールビューティー。里奈は超美少女。性格もハナマルで、強く優しく、たくましく、品のある連中である。幼少のみぎりからその傾向があり、「住む世界が違う」とみんなにもてはやされ、芸能人でもないのに芸能人あつかいだ。今も周囲の視線を集めキラキラとオーラを放っている。

同じ土地で生まれ育ったとは思えん。

俺はうなだれつつ、青信号に変わったのを機に横断歩道を渡った。キラキラなヤツらともすれ違ったが、もちろん俺には目もくれない。華やかに、さわやかに微笑みながら、春の日差しの中を歩いて過ぎる。俺は極力、連中を見ないようにした。

注目などしてやるか。おまえたちに興味なんかない??

ミジンコ並みの意地だった。本音は違う。興味津々だ。特に里奈とは話くらいしてみたい。あんな美少女はテレビにだって、そうそう出てくるもんじゃないからだ。

生まれつき色素が薄いらしく、肌は真っ白で、長い髪は茶色。瞳

も薄い茶色だ。まつげは自然に長くてカールしている。ピンク色の唇に、ぱっちり二重。背は一六〇センチと理想的なサイズ。手足の長さも充分で、華奢なのに胸はある。

まったくよく創られている。傑作だ。高嶺の花どころか天上の人だ。だからこそ優秀な男児が二人も付いてガードしているのだ。俺はそう思う。そう思ってた。この十八年。

なんにしても気分がへこんだ。せつかくジュース一本買える奇跡が台無しである。おかげで思い出したくないことまで思い出した。

あれは中学二年の秋。秋と言えば文化祭。体育祭もあるが、俺は文化祭にこだわりたい。なぜかという体育祭はなんの選手にも選ばれないので、不参加同然だからだ。

母校の文化祭はクジ引きで係が決まる。クラスの出し物に参加するか、実行委員にまわるかだ。もちろん楽なのはクラスの出し物なのだが、俺はクジ運がないので、あっさり実行委員になった。でもまあいい。実行委員といえばバリバリ参加した感がある。たとえばなんにわずらわしい役目だろうと、実行委員の腕章をつけているだけで人に頼りにされるわけだから。……ただのパシリだという不届き者もいるが、そんなのは無視だ。

各クラスから二名ずつ選出された実行委員は一度、生徒会室に集まる。生徒会長？ それはもちろん真部李幸だ。副会長は佐藤海地。生徒会委員の一人には坂本里奈もいる。常につるんでいるというか、自然に寄り固まる三人なのだ。

？この三人を間近に眺められるだけでも実行委員になった甲斐があった？と考えたのは俺だけではない。ほかの実行委員も目を輝かせて、三人を順に食い入るように見つめている。特に男は里奈を、女は真部と佐藤を。

「君たちが今年の実行委員だね。裏方で大変だけど、僕も全力でサポートするから、がんばってね」

全力でサポートとは謙虚な発言。サポートは実行委員のはずなのに、生徒会長殿は自分のほうがアシスタントだとおっしゃるか。いやあ、中身もよくできておりますな。

などと、俺がひとしきり感心していると、

「じゃあ、実行委員の名簿を作るから」

真部は机に向かってノートパソコンを開き、実行委員の顔を見ながら名前を打ち込み始めた。彼が生徒会長たるゆえんはこれだ。数百人という全校生徒の顔と名前を一致させて覚えているのだ。

どういう脳ミソしてるんだろうな？ 記憶力が脆弱な俺にはわからん。

ともかくも、名前をインプットされる前の者はドキドキしながら画面を見つめ、名前が打ち込まれると頬を紅潮させて顔をほころばせた。

どうして、そんな反応をするのだった？ 無論、理由はある。

彼ら三名のいずれかに顔と名前を覚えてもらうことが、わが街のステータスだからだ。念を押しておくが校内ではない。「街」レベルでのステータスだ。覚えてもらうだけでレベル一から五十に上がってしまうくらいの威力がある。

彼らはスターだ。市長よりも偉く、芸能人よりも輝いている。存在自体が街の誇り。生まれただけで名誉市民。嘘のようで本当の話だ。

そんなわけで俺もドキドキして待っていた。ところが？？だ。真部は俺の顔を見るなり、眉間を寄せて手を止めた。

「……えっと、ごめん。君、名前なんて言うんだっけ？」

一瞬、室内が凍った。全校生徒の顔と名前を暗記しているはずの彼が、記憶していないなんてことは珍しい。佐藤も里奈も目を丸めている。だが彼らも、こっそり耳打ちできる情報を持ち合わせていなかった。つまり、あとの二人も俺を知らなかったのだ。

俺は羞恥に顔を真っ赤にしながら、少し押し殺した声で、

「河波斗一です」

と答えた。

ちなみに、このあとに続く実行委員の名前はつまり全くインプットされた。そう、校内でゆいいつ、俺だけが覚えてもらえていなかったのだ。よってレベルは一のままだ。

「まあ、最初はこんなもんだろう」と俺は自身を励ました。

一度顔を合わせて自己紹介したんだから、これからは大丈夫だ。

……いや、待てよ。俺っち、あの三人とは幼稚園から一緒だぞ？

小学校では何度もクラスが一緒だった。それで覚えてねーって、なに？ 実は覚えてるけど覚えてないふり？ 究極の嫌がらせなのか？ 俺、なにか嫌われるようなことしたか？

もんもんと記憶をめぐらす、思い当たる節がない。

否。えてして、したほうは覚えてないもんだ。きつとなにかしたんだろう。しかしこれで許されるはずだ。なかなかシビアな返しを受けたからな。

だがそれ以降も、真部、佐藤、里奈の三名は俺を見るたび小首をかしげ、「誰だっけ？」と尋ねた。こんな執拗な嫌がらせを、さわやかで親切と評判の連中にされるとは思ってもみないことだった。だから俺もヤツらを見かけるたびに、顔を合わせないよう姿をくりました。会いさえしなければ嫌がらせを受けることもない。

とはいえ、この一件があつて以来、俺は中学を卒業するまで全校生徒からシカトされた。別にヤツらに会わなくても間接的に嫌がらせがあつたわけだ。しかし、こんなのは一過性のものだと思ひしなかった。小中学生時代に一緒だった連中のほとんどは、社会に出るとまったく縁のない赤の他人となる。職場が一緒になることも希有だろう。そんな人間のことなんて気にしてもアホらしいじゃないか。

それでも苦痛だった約一年半を終え、高校へ進学した。が、人の噂は謙虚さのカケラもなく広まるもので……。所詮、市内にあるいくつかの中学から寄り集まった生徒らで構成される高校だ。俺が嫌われているらしいという噂は他校にもとどろいており、相当数の初対面人に無視された。最強トリオは有名な私立校で、俺は公立校。せめて学校が違うのだけは良かったが、このあとの三年間も地獄だろうと思うと気がめいつた。

ところが三人に文句を言いに行く気などは、サラサラなかった。どんな恨みを買ったかは不明だが、「知らないヤツ扱い」することで晴らせるというなら、晴らせばいいと思っていた。彼らは俺にとっても憧れの存在だったのだ。だいたい文句なんて言いに行ったら取り巻きにボッコボコだ。

そんな俺に声をかけてきたのが桜井だった。

「弁当、一緒に食わないか？ 女子に囲まれて良ければ」

「はい？」

最後のほう、もう一回言ってもらえませんかね！。

「弁当、一緒にどう？ 俺、男一人ってツライんだよな。助けると思っで一緒してくれよ」

桜井は親指立てて、自分の肩越しにある集団を差した。先には十名近くの女子が机を固めて囲い、こちらの様子をうかがっている。

「あそこで食べるのか？」

「うん、そう」

「なんでハーレム？」

「さあ？ なんか俺と一緒に食べたいんだって」

「食べてやりやいいじゃん」

「だから、もう一人くらい犠牲者が欲しいわけ」

「え？ 犠牲者なのか？ どうみても極楽浄土にしか見えねーぞ、あそこ」

「じゃあ、一緒に食おうぜ？」

「でも俺、最強トリオにどつかで恨み買ってる男だぞ？」

「最強トリオ？」

「知らないのか？ 真部、佐藤、里奈」

「知らない」

「なにっ！？ おまえっ、この街の人間じゃねーな」

「ああ、県外から来たんだ。父親の仕事の都合で」

「なーるほーどねー」。

しかし「この世にあの三人を知らない者は五万といる」という事実を無視し続けてきた街で生まれ育った俺には、驚愕だった。

「んじゃ、今日は一緒に食ってやるけど、その後の身のふり方は考えたほうがいいぜ？」

一応、忠告だけはしておく。

「どうして？」

「この街じゃ、あの三人に睨まれたら最後、犬以下の扱い受けるからだ」

桜井は眉をひそめて苦笑した。

「ええ？ そんなバカな話があるか？ どんな権力者だよ。ヤクザ？」

「見目麗しい三人組。品行方正、頭脳明晰、弱者に優しく、強者も頭をたれるようなオーラを放ちまくってる。まるで神か天使のような存在だ」

「ハハッ、まっさかー？」

「ホントだつて。実物見たら、よくわかる」

放課後、俺は半信半疑の桜井をともなつて、連中の通う学校近くに身をひそめた。そして連中が門をくぐって出てくると、指し示した。

「あ、あいつらだ」

桜井はジッと観察しておいて、俺に向いた。

「なにをして睨まれてるって？」

「だーから、心当たりないんだって。とにかく俺のこと知らないの一点張りだ。幼稚園から一緒だぞ？　ありえねーだろ、いくら俺が影薄いつたって」

「……逆なんじゃないのか？」

「は？」

「いや、こつちのこと。それより、やつぱり俺には関係ないな。そもそも、この街の人間じゃないし。そんなルールにしたがう必要ない」

そう言つて桜井は手を差し出した。

「これからもヨロシク」

俺は目を見開いて、おそろおそろ、その手を握った。「郷に入つては郷に従え」という言葉を知らんのか、そのうち身にしみる日が来るぞ、と思いつつ。

そんなわけで今に至る。ちなみに桜井の身には何もしみなかった。おかげで高校生活は充実した。彼に好かれたい女子は、俺にも優しくかったからだ。

そのイケメン救世主・桜井も東京へ行った。このさき地元の大学で俺を待ち受ける困難はなんだろうーなと思いつつ、自販機にコインを入れる。自販機はいい。あつという間に買えるし、店員に嫌な顔をされずにすむ。

コンビニ店員は地元民だ。最強トリオの味方だ。ゆえに俺のことを嫌悪している。「清算後回し」なんていう嫌がらせは日常茶飯事で、ペットボトル一本買うのに二時間待ちだ。

……なんという、住みにくい街だろう。大学卒業したら、俺も東京行こう。

そう考えて、出てきたコーラを取りつつ、ふり向いた。ヤンキーがいた。五人。なかなかオシャレなヤンキーだ。「芸能事務所に所

属中ですか」と突っ込みたくなるヤンキーだ。

「あんた、河波斗一だろ」

「そーだけど？」

「自販機の使用料払えよ」

「は？」

「おまえはな、この街にいてだけで犯罪なんだよ。この街にある物を使用するなんて、許せねえ」

なんつー無茶苦茶な。ここは無法地帯か。せつかくオシヤレのセンスはあるのに、かつあげとは情けないな。

内心、嘆きつつ、

「三十円しか持ってねーけど」

とバカ正直に答えると、ヤンキーは舌打ちした。

「ちっ、しけたこと言ってんじゃねーよ。家から持って来い。三千円」

三千円〜！？　なんかちよつとリアルな金額だなあ。

俺はあたりをチラチラとうかがった。通り過ぎる人々は、絡まれている俺が噂の男だとわかると、ほくそ笑んで見物を決め込んだ。

つまりヤンキーの味方になった。

学校の連中も街の連中も、たいていはシカトで過ぎるというのに、今日は絡まれた。人生初。金のない連中の目にとまってしまったのが運の尽きなのだろう。

まいった。前例がないだけに逃げ切り方がわからん。

「おら、持っていくのか、来ねえのか！」

ヤンキーはスゴんで、襟首をつかんできた。俺より背え低いのに、なかなかガンバル。じゃあ俺もがんばろう。

「んー、あれば持って来てもいいんだ、あればな。でも残念ながらない。大学に入学控えたガキのいる家に、金があるわけねー。高えぞ入学金」

「んだと！　河波のくせに、生意気だぞ！」

わー、低俗な台詞。しかも生意気なこと、いっさい言っただろーよ

俺。金がないって生意気なのか？ 新発見。それにしても俺より低俗なヤツっているんだな。ふふふ。親近感わくぞ。

「なに笑ってるんだ！」

わわわ、顔に出てたか。しまった。殴られるな、この展開。

俺は歯を食いしばった。その瞬間。ヤンキーの肩に、ポンと手を乗せた人物がいた。

「その人に手を上げるな」

「ああ？」

スゴみを利かせてヤンキーはふり返り、硬直した。佐藤海地がいたからだ。身長一八三センチ。タツパもあるがケンカも強い。なにより最強トリオの一人だ。

「うわわわ、か、海地さんっ」

ヤンキーは恐れおののき、あとずさった。周囲の野次馬も固唾をのんだ。そんな反応などお構いなしの佐藤は、なにげに俺の顔を見た。

「おケガは？」

一見優しい言葉に、俺はウンザリしてそっぽを向いた。

どうせヤツはあれだ。からかう絶好のチャームス！ とか思ってるんだろう。今日はどんな羞恥プレイだ、このド変態。

？？もちろん、俺と関わりのない世界にいる時は、尊敬できる存在だ。パーフェクトな風貌、パーフェクトな人格、パーフェクトな頭脳、パーフェクトな運動神経……連呼すると、ただのパーみたいに思えてくるが、それは錯覚だ。あしからず。

さて、この尊敬すべきパーフェクトマンだが、俺に近寄って来る時は別だ。完璧な人柄の裏にある、たったひとつの？ほころび？が際立つからだ。そこには意味のわからない復讐心に燃える、ただの人間がいる。だから少しくらいは、せめて俺くらいは、ヤツを変態あつかいしてもいいのではないだろうか？ まあ、死んでも口に出して言うてはいけないが。

しかし？？なんだろう。なにか様子がおかしい。野次馬は不安そ

うな顔をする。ヤンキーはうなだれる。俺はゆっくりと目線を戻した。すると佐藤が少し目を潤ませながら、じいっと俺を見つめていた。

な、なな、なんだ!?

得体の知れない恐怖を感じて身構えると、佐藤は静かに口を動かした。

「どうしてあなたは、俺たちを選んでくれないんですか？ まったく納得がいきません」

……ん？ 選ぶって誰が？ なにを？

「あの桜井ってチャラ男が勇者とか、あり得ないでしょう」

あれ？ 幻聴かなあ。今「勇者」って言わなかったか？ なんのゲームの話だよ。つか、桜井とテレビゲームやった記憶はない。もっぱらRPG派の俺とは違い、桜井はパズル系や謎解き系のアドベンチャーばかりで、俺とは趣味が合わなかった。

「てか、なんで桜井、知ってんの？」

俺が疑問を投げると、佐藤はカツとして肩を怒らせた。

「あなたの身边には常に気を配っておりました！ 妙な輩が近づかないようにと、人知れず護衛していたのです。そうしていれば、いつかアプローチがあると期待して??それが突然ふってわいたようなチャラ男を仕えさせたりして！ おかげでこの十数年、どんなにみじめな思いで生きてきたか」

「待て。ぜんぜん話が見えん。だいたいな、最初にシカトしたの、そっちだろう」

俺が反論すると、心外だと言うように佐藤は拳を握り、腕を震わせた。

「幼稚園の時、我々が遊戯に誘ったら、断ったじゃありませんか」「えー？」

あたりまえだが、俺は眉をしかめた。

「んなガキの頃のことなんか、覚えてねーよ」

「遠足で手をつながなければいけない時も、差し出した手をはねの

けた」

「うえ、そうだった？ あ、でも、おまえと手をつなぎたいヤツいっぱいいんじゃないか。俺は、みんなに恨まれんの嫌だから遠慮しただけだ」

「友達の似顔絵を描くという時も、ペアを組んでくれと頼んだ李幸をすげなく断った」

「そりゃ、あれだ。変に描いたら女子から非難されんじゃねえか。俺、画力ねえし」

「里奈が家庭科で焼いたクッキーを渡そうとした時も、受け取らなかった」

「おまえね、周囲の男子の？ 受け取るんじゃない？ 的な空気、つか圧力、いや殺気、感じなかったのか？ 彼女にしてみりゃ、たまたまそこにいた俺に親切でくれようとしたただけだろうけど、俺は生きた心地しなかったぜ」

「……」

「……」

なんだ、この沈黙。俺には耐えきれない沈黙だ。しかも背後にヤンキー、サイドは野次馬、目前には佐藤海地。

あ、ありえねえ。誰か夢だと言ってくれ。さもなくば俺を瞬殺してくれ。

俺はドキドキしたが、そんなことは、おくびにも見せてはいけない。あらたな嫌がらせを思いつかせてはならないからだ。しかも、いまになってやっと原因がつかめた。ヤツらがことごとく俺を突き放していた、その理由。

悪気がなかったにせよ、百パー俺が悪い。そりゃ繊細で上品な彼らは傷ついたことだろう。本当のパーは俺だ。アムソーリー。どんな妬みを買おうと、相手の親切を断るのは良くないことだった。小心者の俺のバカ。海よりも深く反省するから許してくれ。充分な制裁も受けたと思う。もうここらで水に流そうよ。

……などとは素直に言えず、俺は平静をよそおい淡々と述べた。

「ひとつ、確認していいか？」

佐藤はピシッと背筋を伸ばした。

「はいっ、どうぞ」

「俺のこと知らぬ存ぜぬで通してたのって、もしかして、押してダメなら引いてみる、みたいな……？」

今の話を総合するに、おそらくそういうことだろう。俺は一刻も早く解決をみたくて、意を決して尋ねた。佐藤は珍しく顔を真っ赤にしてうつむいた。凶星だったようだ。俺も驚いたが、野次馬もヤンキーも口をあぐりと開けている。

そうだな。開いた口がふさがらないよな。押しも押されもせぬ彼らが、俺の関心を引くため躍起になっていたなんて、誰が信じるよ？俺も信じられんわ。みんなにチャホヤされているだけに、俺みたいな凡人に無視されたことが、そうとう応えたんだろうな。プライドをズツタズタにして悪かったよ。でも、そんな挫折も味わっておいたほうが将来のためだぜ、ベイベ！

どこかで反省していない俺だったが、念のため、申し訳なさそうな表情でチロツと上目づかいに佐藤を見る。すると佐藤はさらに赤面した。

「と、とにかく！あなたをあちらへお連れするのは、我々ですから！」

「は、はい？」

「ご安心ください。役目は立派に果たします。我ら三銃士の名にかけて」

はい、カット。その台詞おかしいよ、君。三銃士ってなんだ。俺、ダルタニアンか。まあ、おたくらの組み合わせは確かに三銃士っぽいけどな。

ちなみに俺が言っている「三銃士」とは、昔のフランス人小説家を書いた有名な物語のタイトル兼、登場人物のことだ。「一人はみんなのために、みんなは一人のために」という名台詞も有名だ。

フランスの片田舎、ガスコーニュ出身のダルタニアンが立身出世

を夢見てパリへ行く。そこで銃士隊で有名なアトス、ポルトス、アラミスの三銃士と協力しながら、次々と迫りくる困難を解決していく物語だ。

……ん？ 待てよ？ 里奈がアラミス？……萌え！ いやいや、あれ原作は男だったよな。某アニメのオリジナル設定が男装した女になっただけだ。気を確かに持とう。

俺はひと呼吸置き、退路を探した。まず後ろはなし。サイドもアウト。となれば佐藤の脇をすり抜けるしかない。俺はタイミングを見計らい、地を蹴った。そのまま青信号の横断歩道を猛ダッシュだ！

「あつ、トイチ様ー！！」

と叫んだ佐藤の声が聞こえたような気がしたが、無視。コーラもシャカシャカふっちゃって、俺は憂うつな午後を迎えたのだった。

春休みは危険の幕開け（後書き）

＊補足 「三銃士」

アレクサンドル・デュマ・ペール（仏）＞1802年～1870年

ダルトニアンは、「ダルトニャン」と表記されるのが一般的なようだ。耳に聞いた感じでは「ダルトニアン」という発音のほうに近いので、筆者はそちらを選択させていただきました。

アラミスはシュヴルーズ公爵夫人と不倫していたという、とんでもない男だが、日本が制作した「アニメ三銃士」では男装の麗人という設定に置きかえられた。公爵夫人と不倫している男では、子供向けアニメとして、ふさわしくないため変更されたのだろーし、ついでにアニメ的な受けを狙ったとも考えられる。

俺の外出事情とS王子

コンビ二前での事件から三日後。

いまさらだが、あの最強トリオが俺に恨みをいだいていたことは判明した。しかもスゲー小さい時のちっさいことで。

「意外にヤツらも、あれだなー、器ねえな」

二階の部屋でベッドに寝転がってボケっとしていると、一階から母の声が聞こえた。

「斗ー！ かあさん、ちょっと出かけるから。お昼と夕飯テキトーに食べてね！ お金、テーブルの上に置いとくから！」

「ふあーい！」

返事をして跳ね起きた。午前十一時半。昼が近い。

俺はさっそく階段をおりて、テーブルの上の二千円を取り、家を出た。

家を出るのは好きじゃないが仕方ない。なるべく散歩に出るような心掛けてもいることだし、メシのためなら重い腰も上げなければならない。

外出がおっくうなのは世間の風当たりが厳しいせいだ。かといって引きこもらないのは、俺が置かれている状況を親が知らないからだ。

さいわいと言っているのか、ご近所さんから職場のみなさんまで両親に対しては普通である。俺のことも巧妙にごまかしているようだ。「よけいにタチが悪い」と言う人もいるかも知れないが、俺は「それでいい」と思っている。

こんな非常事態を親に悟られてはならない。ろくなことにならないのは明々白々だ。ショックを受けるだろうし、まともな人間なら悲しむ。そんなとき、どう言い訳すればいいのか分からない。慰めようも励ましようもない。気の利いた台詞を吐けるほど俺の人生は

深くないのだ。

先日も母が「今日、商店街で真部くんを見かけてね」と、いい年をして乙女のように頬を赤らめ話していた。

「あなたも幼稚園から中学まで一緒だったんだから、一回くらい家に遊びにこさせる甲斐性もちなさいよ」

とまで言われ、俺は苦笑いしてやり過ぎた。

なにも知らない母の小さな幸福と平和を、俺が壊す権利などないはずだ。もちろん、ほかの誰にも。

したがって、俺は外へ出る。健全な精神でいるためにも、両親に不審がられないためにも、必要なことなのだ。

とはいえ弁当屋へ向かえば待ちぼうけを食らわされる。「慣れたからいいや」と言いたいところだが、こんなこと慣れるわけがない。ストレスたまりまくりだ。「引きこもらないこと」健全な精神でいられる」のかどうか、はなはだ疑問に思えてきた。

十一時四十分に注文した弁当が渡されたのは、一時半。いいかげん腹がへる。家に帰ってゆっくり茶でも飲みながら、なんてことはしていられない。

そうとも。そんな悠長なこととしていられるか。空腹こそ精神の崩壊をまねく。

俺だって、よくかんで食べなければいけないのは知っている。だがもうガマンの限界だ。

俺は弁当屋を出たところでメシを勢いよくかき込み、胃袋を満たしてから家路についた。

その途中の出来事だった。不幸は、ひょんなことから訪れる。

「夕飯の弁当も今のうち買っとくか」と、まいど待たされることに疲弊していた俺が思い立つのは必然だったのだが、それがいけなかった。

スーパーがある方角へ踵^{かかひす}を返したところで、私立校のメンツに出

くわした。四人組。春休みのさなかブレザーということは部活帰りだろう。部活帰りということは、いまだ学生しているわけだから、最強トリオの後輩だ。見た目は可もなく不可もなく、俺といい勝負だ。

「……おまえ、河波斗一かわなみといちだな？」

「そうだけど？」

「聞いたぞ。海地かいじさんたちの心づかいを、ことごとく無視し続けてきたんだって？」

やんわりと睨みつけられた。まずい雰囲気だ。いつぞやの単純明快なヤンキーたちとは異なる悪さだ。ひと言で表せば「陰湿」？？俺は逃げようと思ったが、相手のほうが一枚上のように、こちらが行動するより先に腕をつかんできた。

「その性根、オレたちが叩き直してやる」

俺は、ほうほうの体ていで家にたどり着き、ベッドの上に身を投げた。

「うつ……」

五分程度だったがボコボコにしばかれた。身体のアちこちが痛い。今回は佐藤の救いの手もなかった。コンビ二前の一件で完全にキレたのかも知れない。護衛……していたと言っていたような気がするが、すでに記憶があやふやだ。

品性を重んじる連中だから、「自分たちのことで暴力沙汰を起こすのは遠慮してくれ」と、これまで睨みをきかせていたのだろう。しかしアレ以降、解除してしまった可能性は高い。

先行き不安な感じが倍増してしまったな。やっぱり、あそこでは謝り倒すのが正解だったのだろう。しょぼい意地のせいで、うっかり選択を誤った。ゲームオーバー寸前だ。どっかにリセットボタンないかな？

視線をさまよわせ、枕元に置きっぱなしだったケータイに手を伸

ばした。桜井からメールが何件か入っていた。

12:01? 片付け完了! 今からメシ食って、ちよつと都内見物する?

13:30? 渋谷交差点前? (写メ)

15:03? なになに? なんで無反応なわけー? スカイツリーとかの写真が良かったかー??

15:24? 夏休みに呼んでやるから無視すんなよー! (泣)?

?? なんかウンザリした。

「ホント友達いないヤツだなー」

俺はゆつくりとメールを打ち、返信した。

? 悪い。ちよつとボコられてて、それどころじゃなかった。東京の写真なんかいらね。テレビでしょつちゅう見られるもん撮って、なにかおもしろい?

送信。

ケータイはまた枕元に放り、俺は眠りに落ちた。

……い、痛^いつてー!

衝撃的な痛みを感じた俺は、震えあがって目を覚ました。

「あ、ゴメン。シミた?」

ピンセットに綿をはさんで持っている桜井が、のほほんと言った。その体勢からして、おそらく消毒してくれていたのだろうが、尋常じゃなくシミる。

なにしてくれてんだ貴様?? て、おい。

「桜井?」

眉をしかめる俺に、桜井はニコツと笑いかけた。

「飛行機って速いな」

「ぶっ! おまえ! わざわざ飛行機乗って来たのか!?」

「わざわざってこともない。おまえがヒドイ目にあってるっていう

のに、のんきに東京見物してた自分を反省してだな」

「いや、そんなの、おまえに関係ないし」

「友達じゃないか」

「だからって、飛んで来るのはどうかと思うぞ」

「それで？」

「ん？」

「それで、あの三銃士は、なにをしてたんだ？」

人の意見を見無視して唐突だな。しかも笑顔だが、明らかに怒り心頭の声色。怖え……笑いながら怒るヤツ怖え。

つか、なんだそれ。思わず気づかないふりしそうになっただけ、そういう渾名がまかり通ってたりするのか、あの三人。超ハズカシ^{あだな}ーな。最強トリオってネーミングもどうかと思っていたが、三銃士とはな。もはや日本人ですらない。

そついや、みずからも名乗っていたな。周囲に崇められているだけでは飽き足らず、「我こそは、かの有名な三銃士の一人、佐藤海地である」と自己紹介してたりするんだろうか……

は、恥ずかしすぎる。ギャラが発生する仕事ならともかく、とても冷静な考えの人間がやることじゃない。祭り上げられて血迷ったのか？ いや、いや、きつとファンサービスだ。ヒドイありさまだが、期待に応えようとした結果だろう。そこには凡人がおよびもしない苦悩があったに違いない。そして彼らは乗り越えた（越えてはならなかったと思うが）。羞恥心をかなぐり捨て、壁をぶち壊したのだ。スーパースターとしての、ゆるがぬ地位のために？

とか、勝手な想像してみたが、ほぼ間違いないだろうと思えるのが悲しい。努力と勇氣は賞賛するが、お近づきにはなりたくないな。あまりに不憫^{ふびん}なのでフォローしてやろう。

「取り巻きだか後輩だか、得体の知れない連中のやったことだ。あいつらの与り知らぬところだろうよ。別に知ったところで、知ったこっちゃないようなことだしな」

すると桜井は、

「そんなわけあるか！」

とピンセットをグッと握って憤慨した。

「職務怠慢だ！」

どんな職務に従事してるんだよ！ 意味わからんわ！

「俺のために怒ってくれんのは有り難いけど、もう帰れよ。こんなことくらいで飛行機使うな。金もったいねー」

「そうはいくか。おまえ、自分の立場わかってんのか？」

「わかってる」

スゲエちっさいことで最強トリオの恨みを買った、しがない男だよ。

顔をそむけた俺に、桜井はため息をひとつ、もらした。

「とにかく春休みのあいだだけでも、俺、こっちにいることにする」

「はあ！？」

なにを言い出すんだと、俺は視線を戻した。

桜井はジッと俺を見つめていた。計るような、単純に心配しているような、妙な具合に。

「俺という時は、こんなことなかっただろ？」

台詞まで、どこか探るような、求めるようなニュアンスがある。

俺は眉をひそめたが、間がもたないし話も続かないので、それとなく返答した。

「……そういや、そうかな？」

でもそれ、おまえ効果なのか？ 今日ボコられたのは、トリオが規制解除したからじゃないの？

俺が首をかしげていると、桜井はしびれを切らせたように言った。

「こつみえても強いんだよ、俺」

え、自己アピールしたかったのか？ そりゃ彼女とかに告ったら、かなり効果的な台詞じゃね？ いや、「ケン力強いんだ」アピールは女子にしてもウザがられるって話も聞いたことあるな。やっぱ野郎相手のほうがビビらせるためにも効果的か？？て、俺ビビらせてどうする。

あ、もしや「親友」アピールか？ 友人としての価値を押し出したいのか？ 安心しろ、おまえの価値は知っている。今更そんないらん。いらんから東京に帰ってくれ。俺は騎士や王子を待ち望んでいる少女じゃない。もちろん戦隊ヒーローの登場も期待していない。そこにいかなる友情があるうと、ボディガードまでしてもらう義理はないだろう。

「えーと、気持ちだけで結構です」

やんわり断ろうとするあまり、丁寧語になってしまった。

桜井は眉間をよせて、ちよつと睨んだ。

「おまえ、実は俺のこと友達と思ってない？ それとも気をつかつてる？ 本当に平気だって。チンピラの十人や二十人、蹴散らせてみせるって」

や、チンピラじゃねーし。そもそもコイツ、なにしに來たんだっけ？

俺は痛くなりそうな頭をかかえた。

「そんなに強いなんて初耳だけど。なんかやってたか？」

「剣道も柔道も、有段」

俺は目を見開いた。まさに初耳なことを聞いたからだ。

台詞の順番、間違ったじゃねーか……

「稽古とか、いつやってたんだ？ 全然、気づかなかったけど」

「早朝と夜」

「ふうん、意外と努力家なんだな。見直した」

少し感心してやると桜井は嬉しそうにして、消毒液を含ませた綿を腕の傷口にあてた。

「ギーッ！」

拷問のような手当が終わり、俺は心身ともに疲れ果て、ベッドに寝そべった。

くっそー、桜井は絶対Sだな。人が痛がつてんのを見て笑ってやがった。

その桜井Sは今、救急箱のフタを閉じ、床の上にあぐらをかいた。「もう少し様子見ようと思っていたけど、これじゃダメだな。やっぱり春休みのあいだとか言ってるで、さっさと帰っちゃおうか」

お？　なんか知らんが東京帰る気になったか？

腹ばったままの姿勢で俺が顔を向けると、桜井がニツと笑った。

「連中には悪いけど、この勝負、俺の勝ちだな。そうだろ？　トイチ」

……んん？　急にまた、なんの話だろうか。こいつの話はいつも飛ぶな。

俺は眉間を険しくした。そこへ、けたたましく階段を駆け上がる複数の足音。俺はびびって身を起こした。しかし桜井は、「大丈夫」と穏やかに笑んだ。

部屋の戸を開けて入って来たのは、なんと最強トリオだ。

佐藤海地、さとうかいじ真部李幸、まなべしゆ坂本里奈、さかもとりな

う、うおおおおつ、里奈が俺の部屋にー！

という胸中の喜びの絶叫は無視するとして、不法侵入だぞ、君たち。

同じ忠告をしようというのか、スツと立ち上がった桜井が三名と対峙し、冷たい視線を投げかけた。

「おまえらは無能だな。トイチ様をこんな目にあわすなんて」

違った。あさつての方向だ。しかも、なんか敬称つけてるし。ちよつと、異常に恥ずかしくなってきたぞ。超庶民の友達つかまえて「様」はないな。不必要に持ち上げて羞恥心をあおろぐという手法か。おまえも羞恥プレイ好きなド変態なのか。あ、すまん、Sだったな。じゃあ羞恥プレイも好きかな？

俺がみるみる赤くなっていくあいだに、佐藤が一步、進み出た。

「貴様、何者だ。こちらの人間ではないな」

「俺を知らないなんて、無能さに拍車をかけてるな」

「なんだと！」

「俺はトール・ジエイドだ」

最強トリオは顔色を変えた。俺一人だけキョトンだ。どうやら台本もらってない状態で舞台に放り出されたようだな。よし、仕方ない。木か石の役でもやろう。

?? 現実逃避というよりは、* 現実回帰しようと懸命になっていると、桜井が言った。

「トイチ様は俺が連れ帰る」

最強トリオは拳を握り、腕を震わせ、桜井越しに俺を見つめた。

「エンブレムをプリンスにお渡しになるのですか」

またも涙ぐむ佐藤海地。

いや、訳わからんよ。急になんだ。エンブレムって車についてるアレか？ プリンスって誰？ もしかして桜井？ ププツ、世間の印象そのままのジョブかよ?? て、笑ってる場合じゃねえ！ 車なんか持っていないし、王子様の執事でもない。いったい俺になにを望んでるんだ、おまえたち。

はっ！ なけなしの貯金、二万五千円をねらっているのか!?

あれは携帯ゲーム機を買おうと必死こいて貯めた金だ。誰にも渡さねー！

やや錯乱している俺を置き去りにして、桜井はなお不敵に笑んだ。「当然だな。こちらでまともにお仕えしたのは俺だけだ。それに引きかえ、おまえたちは害虫同然の働きしかしていない」

どう聞いても、桜井は最強トリオを侮辱している。俺はハラハラしたが、ヘタに仲裁に入っても悪化させかねないので黙っていた。俺は石、もしくは木。

しばし全員が沈黙。

が、それをやぶるように、今度は真部が身を乗り出した。

「所詮、エンブレム欲しさの行動だろう。そんな浅ましい心をエレメンタルブレイカーが見抜いていないはずはない」

すると桜井は肩をすくめて笑った。

「エンブレムなどいらない。俺が欲しいのはエレメンタルブレイカ―そのものだ。けどまあ、このままだと、エンブレムも自動的に俺のものになってしまうな」

「くっ……！」

佐藤が歯ざしりすると、桜井は勝ち誇ったように口の端を上げて笑い、どこからともなく杖を取り出して、かざした。うねうねグネグネした蔦のような形状の木製の杖。それはシューツという音とともに黒い光を集めた。意外に鋭い輝きに、俺は目を細めた。

目を閉じたのは一瞬だ。一秒もなかったと思う。

俺の外出事情とS王子（後書き）

* 訳注……「現実回帰」筆者の造語です。「現実には、ひとまわりして戻りたい」という感じ。

ワンダーランドと心の現実

蒼い月明かりに照らされた森の中。ラメをちりばめたような葉。ねじまがった幹。地面には湿地帯に咲くような可憐な白い花。ちらほらとホタルも舞っている。

そこへ座っていた。目の前には悠然と見下ろす桜井がいる。そのバックには、しかも面した最強トリオが……

うーん。目の錯覚だろうか。佐藤は金髪に青目だし、真部は銀髪に紫色の瞳だ。里奈も茶髪はそのままだが目が緑色。何が起った。いつヨーロッパに。本格的に三銃士の劇を始めるのか。

「立てるか？」

硬直しているところ桜井に声をかけられ、手を差し出された。

「お、おう」

俺は手を取らずに立ち上がった。置かれている状況をのみ込めないながらも、ひとつだけハッキリわかることがある。それは「桜井も俺の知る桜井ではない」ということだ。ゆえに手など取れなかった。

所在をなくした桜井の手は、やや戸惑ったようにしまわれた。月明かりの中の漆黒の髪。黒水晶のような眼差し。ゆいいつ代わり映えのしない彼でさえ、日本人だとは断定できない雰囲気醸し出している。

おまえらいったい、なんなんだ。

と吐き捨てたい気持ちを抑え、俺は拳を握ってうつむいた。

いきなり鈍器で後頭部を殴られたほうがマシな展開だと思う。数時間前までの日常はなんだったのだろうか、怒りさえ覚える。

そりゃあ最強トリオとは距離を置いていたし、桜井とはたかだか三年のつきあいだ。どれだけ互いのことを知れるかなんて限界がある。だけど、それなりに普通の高校生してたじゃないか。なんの前触れもなく壁をやぶるのは卑怯だろ。

もんもんと胸の内で文句をつぶやくさなかも、だんだんと正気が「ここは異世界ですよ」と認識させてくる。そんな心に焦った。瞬間移動したことは確かだが、そこまで受け入れる準備はできていない。

とはいえ、連中が意味不明な単語を飛ばし始めたあたりから嫌な予感はしていた。やつらが小芝居などしていないことはわかっていた。そのくらいの空気は読める。だから、この事態を全力で否定する気はない。突然すぎるのが気に入らないのだ。こんなのフェアじゃないだろう。考える間くらい与えてくれたってバチはあたらな「お怒りになられているのでは？」

真部が桜井に向かって嘲笑ぎみに言い放った。桜井は舌打ちし、俺の顔をチラリとうかがった。

「怒っているのか？」

桜井の質問に、俺は答えなかった。代わりに佐藤が言った。

「同意を得て連れ帰るのがルールだったはず。あなたも同意を得られていなかったのでは？」

桜井は忌々しそうに口元をゆがめ、俺の腕をつかんだ。

「ふりだしなんてゴメンだぞ。俺に決めてくれ」

「……なにを？」

俺はやつと声を出して尋ねた。桜井は苦虫をかみつぶしたような表情で、つかんでいた手を離れた。

「この三年間で、俺のことは見極めただろ？」

「だから、なんのことだよ」

「はぐらかすな。エンブレムに決まってる」

「エンブレム？」

「勇者として選ばれた者から一人、英雄として認められる者に与える、あれだ」

なんだ。車の前とか後ろについてるアレじゃなかったのか。

「て、おまえ英雄になりたかったの？　ちよっと笑えるんだけど」

「茶化すな。俺は英雄になりたいんじゃない。ただ今回は選ばれな

いとマズイんだ」

「なんで？」

「王位継承権を剥奪される」

「剥奪……？」

俺が眉をひそめると、桜井はバツが悪そうに鼻頭を指でかいた。

「ちよつと遊びが過ぎた」

あー、つまりあれだ。王様みたいなのがいて、ドラ息子に試練を与えたんだな。そーか、おまえドラ息子だったのか。どうせ女とチャラチャラ遊んでたんだろ。うらやましいなチクショー。つか人間界でも遊んでたじゃねーか。反省の色なしだな。ああ「人間界」って言っちゃったよ。こうなりやケクソだな。

「それで？ この三銃士は？」

俺が視線をやると、真部が姿勢を正して発言した。

「我々は純粹に、気高き志をもつて、このたびの試練に望みました。トール王子と一緒にしていただきたくありません」

「いや、もともと一緒にはしてねえよ」

羞恥プレイ好きのドSなイケメンという以外は。

「どうですか、トイチ様。ここは仕切り直しということで、我々三名の中から選ばれては」

「バカ言うな！」

桜井が憤慨した。

「遠巻きに指をくわえて見ていただけの連中に、やすやすとエンブレムを渡せるか！ だいたいトイチ様のこのケガも、おまえたちが要因だろう。どう責任とるつもりだ！」

「下心たつぷりに仕えていた王子に言われたくありませんね」

「物欲しそうな顔したビンボー三銃士に言われたくないな」

「黙れ。金と権力にまみれた薄汚いプリンスめ」

「なんだと、この野良三銃士」

イケメン王子とクールビューティー銃士が罵り合うのも、けっこう見苦しい。品性はどうした、真部くん。

ともかくも、置かれている状況はだいたい把握できた。エンブレムとかいうのを与えてくれるらしい人物と俺とを間違えてるんだな、こいつらは。なるほど。俺に対する態度の謎が少し解けたぞ。いやいや、それにしてはぞんざいな扱いを受けた気もするが？ ま、俺と間違えられるくらいだからな。たいしたヤツじゃないんだろう。まったくいい迷惑だな。……早いところ事態を收拾しよう。

「注目！」

俺は声を張り上げた。王子と三銃士の視線が集まった。俺は咳払いし、胸を張った。

「ここでひとつ、重大なお知らせがある！」

「な、なんでしょう」

「うむ。心して聞け」

「は、はい」

「俺はエンブレムとか知らないし、この世界がなんなのかも不明だ。つまり！ おまえたちは大きな勘違いをしている！」

王子と三銃士は目を点にして固まった。よし、言っちゃったぞ。

バカめ。俺はただの人間で、絵に描いたような凡人だ。そんな人間とエンブレムとやらを与えるらしい人物とを間違えるとは、笑止だな！

「……え？ まさか」

徐々に目を見開く彼らに向かい、俺は駄目押ししてやれとばかり、思いつきり首を縦にふった。

「完全な人違いだ。というわけで、俺を元の世界に帰してくれ」

桜井をはじめ、最強トリオは硬い表情で俺を眺めた。

「おかしいな。絶対に間違いないと思ったのに」

「絶対に間違いだろ。どこを見て言ってるんだ。つか最初に確かめる」

「それはできないルールだ。しかし名前に？ イチ？ がついていて、かつ三銃士が転生した近辺に生活している同期の桜という条件では、おまえが一番はまっていた」

はい？ 俺の耳が確かなら言つてやろうか。おまえら「アホ」だろ。意中の人物捜す情報が、たったのそれだけか。たったそれだけで俺だと判断したのか。そりゃあ取り違いも起こるだろう。名前に？ イチ？ のつく野郎がどれだけいると思つてんだ。ちゃんと市内中、捜しまわつたのか？

「大丈夫かよ、おまえら。ルールも大事か知らないが臨機応変に対処しろ。今頃、本物さんが路頭に迷つてんじゃないのか？」

佐藤がハツと反応して唸つた。

「ムダな歳月を過ごしたというわけか。くそつ。こうしてはおれん。さつそく捜しに向かうぞ」

三銃士はさつそうと立ち去り、一步出遅れた感のある桜井も慌てて杖をかざした。杖の先に集まる黒い光？？桜井は消えた。

そして、俺は。

取り残された。右も左もわからない森の中、おいてきぼりをくらつた。おまけに部屋から直行だったので、裸足だ。

「じよ、冗談だろ、おい」

無責任にもほどがある。勝手に連れて来て、違っていたら知らぬ存ぜぬか。

俺は途方に暮れ、空を見上げた。満点の星。綺麗だ。小さな星のまたたきまで無数に確認できる。月明かりに照らされながら、これだけの量の星が肉眼で見られるとは、ここは相当、環境がいいに違いない。

星座はやはり大きな星をつないで作るのが基本だよな。よし、あれとこれを、つないで？？なんの形にもならんな。

とか、のんきに天体観測している場合じゃない。とにかく森を出て人里を探そう。言葉が通じるか否かは別として。いや待てよ。案外ここで待っていれば、人ひとり置き去りにしたことを思い出した

連中が、迎えに来てくれるかも。

と、腕を組んで思案してみるが、こめかみがうずいた。

うーん、あんな身勝手そうな連中が、もはや用済みとなった俺を思い出すだろうか。用済みどころか用なしだったわけだしな。なんということだ。こんなことなら、ちゃんとした対応を受けてから正体を明かすべきだった。

いまさら遅いので、とりあえず歩を踏み出した。ときおり雑草をかき分け、けもの道を行き、あてもなく歩く。だが心は落ち着いていた。案外、俺もタフなのかも知れない。

まあ、森がメルヘンチックだしな。危機感なんぞ、そがれまくりだ。地面はフカフカで裸足でも痛くないし、ところどころにカワイイきのこが生えていて、夜行性の小動物がウロウロしている。そして虫の声は子守唄のように優しい。

虫が鳴いているということは秋なのだろうか。しかし蛍がなあ、

初夏だよなあ。ここ、季節感はないのかもしれない。

森を形成している木々の葉は月の光を受けてキラキラと輝き、飛び交う蛍も道を照らしている。夜なのに明るすぎる森だ。そして球体の花を咲かせている植物に触れると鈴の音が響く。とても澄んで美しい音色だ。

まるで絵本の世界。ひょっこり小人が出てきても驚かないぞ。いつそ出てきてほしい。話のわかる小人が。

甘かった。結局、夜明けまで何者にも出くわさず、森を抜け、草原を歩いている。前方から日が昇ってきた。ここでの方位が元いた世界と同じならば、東に向かっているのだろう。

人間、太陽に向かって歩いていれば、まず間違いない。まったく根拠はないけどな。

「そっぴや腹へったな」

昼に食べたきりだったと、あたりを見まわした。だが一帯は草原だ。食えそうなものはない。人里もない。
「歩くよりほかなさそうだな」

さて、三時間は歩いたんじゃないだろうか。空腹と疲労で足元がおぼつかなくなってきた。しかも草原を歩いていたはずが、いつのまにか荒野だ。

はじめて訪れた森の豊かさとは縁のない荒地。乾いた土と貧相な雑草と、照りつける太陽。ときおり吹く風が熱を帯びていて、埃を巻き上げる。

俺は「このまま進むと確実に砂漠だろうな」と予感させる錆びた匂いにむせて、咳き込んだ。

……水、飲みてえな。

喉が渴いた。吸い込む息が食道の壁面に張りつく。脱水症状が出るのも時間の問題だろう。しかし見渡すたびに果てしない荒野。川のせせらぎも聞こえず、水の気配はいつさいない。足裏も痛くなってきた。さすがに裸足でここを歩くのは無謀だ。熱いし。苦行じゃあるまいし。

くそつ、恨むぞ桜井。友達だなんて、嘘つきめ。エンブレムってやつが目当てだったんだな。そりゃ世話にもなった。けど心がなきや何もなかったのと同じだ。おまえは何もなかったのと同じだ。たとえ俺がエンブレムを持ってたって、おまえには絶対やらねえ。もちろん三銃士にだって。

??本物はやるだろうか。見る目のあるヤツなら、やらねえよな？俺はその場に座り込んだ。もう限界だった。

木陰がないのでジリジリと日に照らされっぱなしだが、どうでもいい。ひどく投げやりな気持ちだ。やはり空腹は精神の崩壊をまねく。

することもないので空をあおいだ。ゆうべ見た美しい夜空が嘘のように、雲ひとつない真っ青な空。地獄のような晴天。

単純に、引き返せば森に着くだろう。だが距離を思うと萎^なえる。

ここで終わりか、俺の人生。中二から高校卒業まで、全校生徒のみならず街人からシカトされ続け、あげく見知らぬ土地に放り出されて昇天……ム力つくな。あんな連中に勘違いから振りまわされて行き倒れとか。後世まで祟^なってやるから覚悟しろ。

死の間際の悪態をついてから、俺は仰向けに寝て目を閉じた。ゆっくり死ぬのはキツイだろうが、どうしようもない。ここは俺が生まれ育った世界じゃないんだ。きっと生き延びても苦難しか待ち受けていないだろう。ならばいっそ、ここで尽きたほうがいいに決まっている。

俺は渴きと飢えに生きる希望まで失った。肌を焼く日光が容赦なく身体の水分を奪う。それは同時に異世界にあることの現実を叩きつけていた。

本当に、もうダメだろう。

そう思った矢先だった。

「おい、死んでるのかー？ 生きてたら返事しろー」
横柄な口調の声がかかった。言葉はわかるが、声の主に心当たりがない。

俺は目を開け、視線だけを投げた。

ラバ、いやラクダ、いいやウシ、シカ、ウマ……よくわからない生き物にまたがった無精髭の男の姿が目には焼きついた。

ハリウッド！

心の中で思わず叫んだ。ハリウッド俳優さながらの風貌だったからだ。亜麻色の髪にグレーの瞳。精悍な面差し。おそらく高身長。野性味ただよう表情と笑みがカッコよく、口元からは白い歯がのぞく。全体的にベージュの衣装で、はおったマントの裾はほころび、ブーツも薄汚れているが、いい味を出している。三十代あちこちの様子だが、かなり渋い。こういう男になりたかったよな、と思わせ

る男だ。

ただひとつ難点をあげるとすれば、耳の先がとがっていることだろう。連想されるのは悪魔だが……

いつきに血の気が引いた。

地獄からのお迎えとかなしだろ。勘弁してくれ。俺は潔白だ。とくに善もおこなわなかったが悪じゃない。

見も知らぬ神様に向かって必死に言い訳しながら、再び目を閉じた。強く閉じた。絶対に目を合わせてはならない、そんな気がした。しかし男が地におり立ち、近づいて来る音と気配を感じる。万事休す。

「こら、生きてんだろ、無視するな小僧」

髪をつかまれた。身が縮まったが、どうせ死ぬつもりだったのだ。俺は「悪魔と戦ったっていいじゃないか」と妙な具合に開き直り、目を開けた。

男はしばらく無言で俺を眺め、やがて言った。

「なんだ、ヒューマンか。ちっ、気づくんじゃなかったなあ」

ヒューマン……位置づけは「人」と解釈していいんだろうな。

「ここはフェアリー自治区だ。どうしてヒューマンがいる？」

フェ、フェアリー。ということは、待てよ。あんた妖精なのか？

悪魔じゃなくて？ 助かった！ けど、なんか夢が壊れるなあ。妖精といえば、ちっちゃくて羽根が生えてて女の子でキュートなイメージなんだが？？どうみてもワイルドなガンマンだ。

「おい、質問に答えろ」

イラ立つ男に、言葉を発する元気もない俺は、懸命に声をしぼり出して答えた。

「み、水くれ」

世間様に、命汚いと言われようが何言われようが構わない。急に

死にたくなかったのだ。

相手は言葉がわかるうえに、極悪そうでもない男である。水の一杯くらいくれるだろうという希望がわいた。ついでに生き延びて、俺を置き去りにした連中に文句のひとつも言い、唾を吐きかけてやるうという復讐心も目覚めた。

男はまず、腰元の水筒を渡してくれた。俺は急いで受け取り、遠慮なく飲み干した。

「うち来るか？」

なけば呆れた様子の誘いにも、すばやく乗った。

「行きます」

男は二ヒルに笑った。

「おかしな野郎だぜ。ヒューマンのくせによ」

で、荒野の端とも中間とも判断がつかない場所にポツンとたたずむ、小屋へたどり着いた。形状はラクダ、背中の模様は子鹿、頭部の角は牛、足はラバ、たてがみと尾が馬という、訳わからん動物の背に揺られ。

男の名はクレイ。脱水症状寸前のうえ裸足である俺を哀れに思っ
たらしいクレイは、動物の背を俺に譲り、徒歩で引いて行ってくれたのだ。

「シャーリー、水、用意してくれ」

俺を連れて小屋の戸を開けるなり、クレイは言った。中にいたシャーリーと呼ばれた女は、両手を腰にあて首をかしげた。

「なーに？ 帰ってくるなり」

そこで俺は最大級に目を見開いた。シャーリーがナイスバディなお姉さんだったからだ。

衣装は金属っぽい質感の黒ビキニで、ベージュのマントをつけている。足元はかかとの高い黒のロングブーツ。なにかの女王様を連想してしまうが、とにかく美人だ。ゆるやかに波打つ長いブロードヘアと琥珀色の瞳。厚めの唇。胸は豊かで、クビレもしっかりあ

る。全体の露出度はR指定ギリギリだ。

エ、エロイ。クレイの彼女が奥さんだろうな。やっぱりハリウッドには女優がつきものか。いいなー。

「そのへんのイスに座って待ってな」

クレイが言った。木製の四角いテーブルの周囲に、同じく木製のイスが四脚ある。疲れていた俺は、素直に言葉にしたがった。

「だあれ？ この子」

シャーリーは水差しから水をコップに注ぎつつ、眉をひそめた。

「そっぴや名前聞いてなかったな。なんて名前だ」

クレイに尋ねられ、俺は戸惑った。本当はクレイが自己紹介してくれた時点で名乗り返すべきだったのだが、喉の奥でのみ込んでしまった。桜井たちの話が周知のことなら、また名前から勘違いされてしまうのではないかと警戒したからだ。

「やーね。名前も知らない子を連れてきたの？ しかもなに？ ヒューマンじゃない」

「行き倒れてたんだ。俺だってヒューマンなんか助けたくないさ。

だが、この自治区にヒューマンの死体が転がったら、あとあと面倒だろうがよ」

「そりゃそうだけど」

シャーリーは俺を見つめ、水で満たされたコップを差し出した。

俺は会釈して受け取り、いつきに飲み干した。

「よっぽど喉が渴いてたのね」

「腹もへってるんです」

シャーリーはこめかみを痙攣けいれんさせた。

「……図々しい子ね」

「人間、極限状態になると恥も外聞もないんです」

「あらそう。パンとスープしかないけど、食べる？」

「喜んで」

飢えと渇きから解放された俺は、脳に糖分が補給されたせいかな
考回路が正常に戻った。ゆえに「自己紹介なんて名字でいいじゃん」
という単純な答えを導き出すことができ、あらためて二人に向かっ
た。

「あ、申し遅れました。俺、カワナミっていいいます」

「ホントに、おせえ」

クレイは呆れ顔と怒り顔、半々で応えた。

「ごもつとも。命の恩人にいまさら名乗るなんて、失礼きわまりな
いよな。」

「で？ なにがありや、あんなところで行き倒れんだ？」

「このへんのこと詳しくないんです」

「迷子かよ」

「はあ」

「ちつ。とにかくよー、ここで俺の世話になったからには、長に目
通りしてもらうぜ？ 覚悟はいいかよ？」

「おさ？」

「長老」

泊めてくれとは言わないが、ひと眠りさせてもらいたかった。し
かし休憩する暇もなく、俺はまたあの形容しがたい生き物に乗せら
れ、荒野を横断させられた。

今、街にいる。

おもにレンガ造りの街並。森の中にある街で環境重視らしく、緑
がまぶしいくらいにいっぱいだ。家は木々を切り倒すことなく隙間
を縫って建てられている様子。ゆえに人工物でありながら森に溶け
込んでいる。

行き交う人々は穏やかそうで、ほどよく繁栄している商店街も素
朴さがある。なかなかいい街だ。

「おまえ靴くらい履けよ。ないのか？」

馬代わりの動物の背からおりる時にクレイに言われた。俺はうつむいて自分の足元を見た。

「ないです」

「とんだ貧乏人だな。その服も……妙ちきりんだ」

だろうな。長袖のプリントTシャツにジーパンなんて、妖精さんには妙だろ。だが俺の世界では超無難なファッションなんだよ。目立ちもせずダサくもない。いたって平凡で一般的なんだよ。

ま、そんなこと力説する気はないが。

「しょーがねえな。あとで金返せよ」

クレイは俺の手を引き、店に入った。どうやら衣装と靴をそろえてくれるらしい。口では「金返せ」と言いながら、返してもらえる見込みがないのは明らかだろうに、さすがハリウッド。太っ腹。

黒いハイネックのノースリーブ。ベージュ色のマント。カーキ色のズボンに茶色のミドルブーツ。

「このマント、なにか意味あるんですか？」

俺が尋ねると、クレイは脱力した。

「そんなことも知らねえのか。スゲエ田舎者だな。ベージュのマントは、この自治区のカラーだろうが。連れ歩くのに、つけといてもらわねえと困んだよ」

「あー、そうですか」

コスプレみたいで恥ずかしいなと思ったが、せつかくそろえてくれたものを嫌がるわけにもいかない。ありがたく着させてもらった。

「お、似合うじゃねえか」

「え、ホントですか？」

試着室から着替えて出てきた俺を見て、クレイが褒めてくれた。めったに褒められたことのない俺は、ちよつと嬉しくて照れ笑いた。

「長老に会ったからな、粗相するなよ？」

「あ、はい」

気のゆるんだ俺をたしなめるようにクレイが言い、俺は背筋をのばした。

そりやそうだ。偉い人に会つのに妙な衣装では失礼だからと一式そろえてくれたのだ。俺のためじゃない。

俺のためじゃない。

その言葉が変に冷たく胸に突き刺さった。どうしてだろうか。まるで遠いむかし負った傷のように、うずく。

桜井のせいだな。

と、むりやり結論づけた。金なし特技なし頭脳フツの、なんのメリットもない俺を友達だといい、メシをおごったりカラオケ誘ったりしたのは、とどのつまりエンブレムのため。俺が好きとか気が合うからとか、都合がいいからじゃなかった。街中の住人から無視されている、俺のためじゃなかった。救世主なんてお笑いぐさだ。

俺は何を勘違いしていたのだろう。なんの価値もないのに、人並みに大切に思い思われる友達がいるとでも？ そんなわけないじゃないか。見知らぬ森に置き去りにしたって平気なんだ。きっと誰もが桜井と同じ。俺の行方など気にしないで過ぎるだろう。きっと誰でも？？親ですら、もしかしたら。

今になって考えてみれば、いかに巧妙に隠していたとはいえ街規模のシカトに気づかないなんて、よっぽど俺に関心ないとは思えない。メシだって、たいてい一人で食っていた。共働きだから仕方ないのだが、そんな記憶しかないのは寂しすぎる。

見知らぬ土地にいるせいか、なにかもが信じられない気分になった。ブルーだ。五月病のような憂うつさだ。遅ればせながら、異世界に飛ばされたショックが襲ってきたみたいだった。

クレイに連れられて辿り着いたのは、寺院のような建物。西洋の

田舎にひっそりと建てられた礼拝堂のような、慎まやかな建物だ。白い石材が使われていて、正面上部に飾られた青いステンドグラスが陽光をキラキラと反射している。三段ほどの幅の広い階段をのぼったところがエントランスだ。

「ここで待つてろ。ちよつと事情を説明してくる」

俺は言われるまま立ち止まりクレイを見送った。そして建物を背にするように振り向くと、階段下に集まった数人が訝しげにして俺を観察した。おそらく「ヒューマン」だから、だろう。

ここの妖精とヒューマンの関係は不明だが、クレイの態度から、あまり良い関係とは思えない。だが石を投げ合うほど悪くもないようだ。

俺は疲労もあって、階段に座り込んだ。階段にも使われている白い石材は光沢がなく、表面が粉をふいている。ちよつと触って確認したが、粉はサラサラとしていて手につかない。俺は暇を持て余して、しばらく表面をなでていた。粉はベビーパウダーに似ている。手触りがいい。

そうしていると七つくらいの少女がハンカチを持って寄ってきた。手を拭けという意味だろうか。しかし粉が手につかないことくらいは少女も知っているだろう。ということは、もしかして儀式？ そうだな。ここ寺院っぽいもんな。神聖な場所へと導く階段を、いきなり素手で触ってはいけなかったのかも知れない。

まずいな。うまくやり過ぎないと。

俺はとりあえず、手は洗っていて汚くないと証明するつもりで、手の平を見せた。少女はハツとし、ぎこちなくお辞儀して下がった。よしよし、意図は伝わったみたいだ。

俺は安堵して、少女やその周りにいる人々に愛想笑いをした。そこへクレイが戻ってきた。

「お、バカ、そんなところに座ったら、ケツ真っ白になるぞ？」

「えっ!？」

俺は慌てて立ち上がり、マントを払って自分の肩越しにケツを見

た。だが問題ない。ホツとした。買ってもらったばかりの衣装を汚しちゃ悪いもんな。

俺はささいな失態をごまかすように笑って、クレイを見上げた。

「大丈夫。汚れてません」

が、クレイは固まった。目を見開き、俺を凝視している。

「……え？」

俺のどこに落ち度があったのか分からない。

クレイは勢いよく俺の腕をつかみ、力強く建物の中へと引き入れ、客室らしい部屋に放ると外から鍵をした。

「そこで、おとなしくしている。おまえの処遇は長老とよく話し合っただうえで決める」

まさかの監禁。

しよ、処遇ってなんだよ。えー？ 階段に座ってケツ汚さなかったって、もしかして軽犯罪？ それとも重罪？ どんな犯罪？

ああ、しくじった。「俺はよそ者だから、こちらの法律とか知りません。やつちやいけないことは前もって教えてください」と言っておくべきだった。今度こそ、俺の人生終わりかも……

ホームワード・バウンド

さあ、困ったことになった。

部屋には丸窓が計八つある。が、すべて顔面サイズだ。開閉も不可能で、明かり取りの用途しかない。「ぶち割って外に出る」という芸当はできないだろう。万が一そうするというなら「壁ごと」だが、あいにく俺は怪力サムソンじゃない。体力測定では平均値男と呼ばれていたくらい、腕力も握力も人並みだ。

ちなみに「怪力サムソン」とは、旧約聖書に出てくる超人だ。生まれてから一度も切ったことがない髪に怪力の源があった。しかし敵の女に騙され髪を切られてしまい、ただの人間に。その後、敵に捕まり目をえぐられ、両腕を鉄鎖につながれたあげく見せ物に。が生きてさえいれば髪はまた伸びる。

怪力を取り戻したサムソンは、敵の神殿を破壊して復讐を果たした。だが、みずからもその下敷きになって死んでしまうという……うらやましくない男だ。

それはさておき。この部屋、ほかにも難点がある。ベッドとクロ―ゼットと小さな丸テーブルだけで埋まってしまっていて、かなり窮屈だ。六畳……あるのか怪しい。漆喰の壁と剥き出しの梁、^{はり}全体的にアンティークな感じでまとまっているが、息が詰まる。あかすの窓がそこに追い打ちをかけている。

当直の先生でも、もうちょっとマシな部屋に泊まるだろう。こう、センスはないが利便性のある??ここはカップラーメンの湯を沸かすガス台もなければ、トイレもない。ただ寝るだけの部屋だ。くどいようだが、極めつけに窓が開かない。そのうえ小さい。

空気の入れ替えはどうするんだ。ひよっとしなくても酸欠にならないか?

俺は致し方なくベッドに腰かけた。クッションがきいている。枕も羽毛がふんだんに使われているらしく、フワフワだ。おかげで、どっと疲れが出てきた。もともと疲れは感じていたが、プラス睡魔が襲った。

俺の明日はないかもしれない。だが眠気に打ち勝つことはできなかった。

爆睡し、スカツと目覚めた。おかげさまで、まだ生きている。

上体を起こしてみると、いつのまにか食事を乗せたワゴンがベッド脇に置いてあった。せまい部屋が一段とせまくなったわけだが、食事なら文句は言うまい。食わせてやろうという気持ちがあるということは、当面は生かしておいてくれるのだろう。よりよく解釈するなら「殺すつもりはない」という意思表示だ。

それにしてもシヤレたワゴンだ。ステンレスみたいな無機質な感じではなく、乳白色で磁器っぽいツヤがある。二段式で、野バラが描かれているところなんか、高級感ただよっている。

上段にある銀色のドームカバーを取ってみると、おかずは鳥らしき肉料理だった。となりのバスケットにはロールパン。下段には茶器がそろえてあり、ティーポットはまだ温かい。運ばれたばかりだと思われる。窓の外もやや暗い。今がちょうど夕飯時なのだろう。

なんの肉かわからないところが恐ろしいが、この世界の者が食しているものだろうし、遠慮なくいただくことにした。

「う、うまっ」

肉はガキのころ一度だけ食べた七面鳥に近い味。パンは焼きたたで、紅茶は香り高い。こんなまともな食事は近年稀だ。俺は夢中になって食べた。

「ごっそさん」

あっというまに完食。腹が満たされたので、あらためて部屋の中

を見まわした。クローゼット脇の壁につけられた小さな棚に一冊の本をみつけた。言葉が通じるのだから文字も読めるのではと期待し、立ち上がって手に取ってみた。

革製の表紙。B5サイズで三センチほどの厚み。少し古めかしいので、やぶかないよう、そつと開いた。

「……うーむ」

眉間にシワが寄った。見たことのない文字だった。漢字どころかアルファベットやキリル文字、ハングル文字ですらない。解読不能しかたないので、ところどころにある挿絵を眺めた。

羽根の生えた小さな妖精。

カゴに捕らえられている妖精。

そのカゴを持ち、剣を振りかざす人間。

森林火災。

木こり。

身を横たえる妖精たち。

王冠を乗せている男。

両腕を広げている、長い髪とヒゲの老人。

銃を構える数人の男。

なにかのシンボルマーク。

人と体格差のない妖精。

妖精と人間と、そのあいだに立つ男。

わかったぞ。これはファンタジー小説だ。字が読めれば退屈しのぎになっただろうに、惜しいことだ。

?? 未来の俺がここにいたら「ちげーよ!」と突っ込みを入れるところだが、あいにく今の俺は本気でそう思っていた。そもそも『歴史書』なんていう堅苦しいものは、俺の許容範疇を越えている。やむなく本は棚に戻した。しかし、ほかに楽しらしきものがない。たーいくつ。

て、待て待て。監禁中だったよ。少しは身の上を心配しよう。どうやって罪を軽くするのか考える。弁護士プリーズ！　つか、どの程度の罪なのか判明してないな。どうなってんだろ。あのハリウッド、まだ長老と話してんのか？

ドアに目をやった。するとガチャツと開いた。

ん？　あれ？　鍵開けた雰囲気なかったな。ひょっとして無罪放免になったのか？　そーだよな。冷静に考えたらケツ汚さなかっただけだぜ。褒められたって怒られることじゃない。

だが部屋に入ってきたクレイは、硬い表情をしていた。

「カワナミ、おまえ、本当の名は？」

ギリ。

え？　そこに戻る？　自己紹介からリスタート？　……なんか、また誤解されてるっぽいな。あ、頭痛い。クレイの視線も痛い。どうしよう。

互いに汗をにじませながら、しばらく無言で向かい合った。苦手な沈黙だ。

うーむ。ここは正直に答えたらうで誤解を解くのが最善かもな。

俺は決心して口を割った。が、そのわりにちよつと挙動不審な態度で答えてしまった。本番に弱い日本人の典型、それが俺である。

「カ、カワナミ、トイチだ、けど」

かみかみだ！　まずい！　怪しい！

「トイチ、か」

クレイは大きく息を吸って反復した。

トイチという名前に反応するなんて、やっぱりそこがネックなんだな。この世界の住人は。

「あ、あの、たまたま、そういう名前なだけで、エンブレムと俺は無関係です」

いまのうちに弁明しておこうと、俺は早口に説明した。が、「エンブレム」という発言に、クレイは尖った耳をピクピクさせた。

「誰がエンブレムと関係あるのかって聞いたよ？」

ぎゃー！ 墓穴！

「で、でで、でもつ、本当に偶然、そういう名前なわけで」

俺は必死に否定した。しかし、クレイはさえぎるように強く舌打ちした。

「バカにしてんのか、おい。学校は出てないが知識はある。イチとは四大元素のイチだ。火のイチ、水のイチ、風のイチ、土のイチ。最も小さい値のイチだ。この世ではエレメンタルブレイカーのみが、この最小のイチを精製できる」

「つ、つまり？」

「名前にイチの文字を使用しているのは、エレメンタルブレイカーだけだ」

知るか！

俺は険しい顔で腕組みし、心底うなつた。なにかラチがあかない。ここはイチかバチか異世界人であることを告白しよう。そのほうが解決早いに違いない。

というわけで、自分の中でそれなりにスゴイ決心をした。

「申し訳ありませんが、それ本当に俺じゃないです。俺は地球って星の日本という国に住んでいました。つい昨日か、おとついまで。そこでは名前にイチがつくヤツなんて五万といるんです」

「それは知っている」

ガクツ。えー？　じゃあなんで納得してくれないんだよー！

俺は腕組みをとりて脱力し、答えを求めるようにクレイをみつめた。クレイは察したように、うなずいた。

「試練の場を選んでところだろ？　知ってるぜ。いましがた長老から説明受けたところだ。それより勇者どもはどうした。一緒にじゃねえのか」

勇者どもって……あの最強トリオと桜井のこと、だろうな。まったく、どこが勇者だよ。ロクな思い出ねーよ、くそつ。

俺はふてくされつつ、投げやりに答えた。

「人違いだとわかって、またあつちに帰っていきました。それで俺、

置いてかれて最悪なんですけど、どうにかありませんか」

「人違い？」

「そう人違い。だから、どうにかしてください」

「どうにかって？」

「元の世界に返してもらいたいんです」

「……妖精の粉がつかなかった人間を？」

クレイは不敵に笑った。映画でよく観るシーンみたいだったが、これは現実だ。俺はゾツとした。

「なめてもらっちゃ困るぜ、トイチ様？ 勇者の目にとまって、こち流されて、名前がトイチで妖精の粉をつけないなんて条件そろえて、人違いだと？」

「よ、妖精の粉？」

「階段に使ってる石の粉だよ」

ああ、あのベビーパウダーか。さすが異世界だな。由来とか成分とか原理がまったく未知だ。

しかし妖精の粉というと、ピンクやゴールドにキラキラ輝いていて、身体にパパッとふりかけ楽しいことを想像すると空を飛べちゃうアイテムだろ。階段なんかにあっていいのか。

「て？？あれ？ イメージと違うな。ぜんぜん光ってなかったし」

「は？」

「わわわ、こっちのことです。とにかく本当に身に覚えのないことで、目えつけられてもどうしようもないんですつ。もし戻せるんなら、戻してください！」

顔の前で手を合わせて、真剣におがんだ。

もうマジで信じてもらわなければ困る。街人に無視されようが、レジ待たされようが、生まれ育った世界ほどいいものはない。異世界は心細い。これでもし言葉が通じなかったら即アウトだ。

法律は無論、一般常識も知らない。文字もわからない。地理的知識も皆無。十八すぎた平凡な頭で一から学習しなおすのは厳しすぎる。

そもそも学校に通わせてもらえるのか疑問だ。家庭教師がつくとも思えない。納税制度があるかどうか不明だが、あるとしたら、先祖代々この地に税金払ってこなかった者の末裔を誰が養うというんだ。そんな甘い世の中、存在するわけない。

なによりも向こうに残してきた貯金が気になる。こんなことなら、さつさと現物に変えておくんだった。欲しいソフトもあったのに。

……どうみても、ここには代用できそうな娯楽がない。次元の低い話だが、俺には切実だったりする。願わくは強制送還だ。

再び向かい合って沈黙すること数分。クレイは、それはそれは深いため息をついたあと応えた。

「わかった、戻してやる」

俺は一瞬信じられなくて、言葉がでなかった。九割「ダメだ」と言われること覚悟だったのだ。奇跡の大逆転。

「い、いいんですか？ ホントに？」

「ああ」

やつ……たー！ クレイ、あんたは俺の救世主だ！ 迷惑だろうがそういうことにしておいてくれ！ 一生恩に着る！

そんな心地でクレイを見つめていたものだから、きつと目がウルウルしていたのだろう。クレイは引き気味に苦笑いした。

「断っておくが疑惑が晴れたわけじゃねえぞ？ さつさと英雄選んで帰ってこいと言いたいところだ」

え、英雄か。英雄ってそもそもなんだ？ 人助けする人のことじゃねえの？ ふっ、あの勇者どもが人助けたと？ 笑わせんな。ほんとど歩く公害だ。勇者ってことすら認めたくねえよ。

「じゃあよ、さつそく準備するから、こっちこい」

「は？ あ、はい！」

おお！ さつそく返してくれるのか！ いいヤツだな、クレイって。

で、実際に俺を返してくれるのは長老と呼ばれている男だった。

長老というからには、長い白髪に白ヒゲの老人かと思いきや、意外に若いナイスミドルである。

紺色の髪と青い瞳。ハンサムでスタイルも良く、威厳がある。

この世界はあれか。美男美女しかないのか。いやいや、少なくとも外にいた住人は普通だった。もし異世界人じゃないとしても、俺の居場所は確実に「この建物の外」だな。

俺は萎縮しつつ長老の前に立った。すると、

「そんなに異世界へ行きたいというからには、なにか深いお考えが
ありなのでしょうが、思いなおされてはいかがです？」

と開口一番に言われた。

敬語にゲンナリした。これは、なんちゃらブレイカー前提だから
なのだろう。もうあれだ。本物さんが現れるまで俺への誤解はとけ
ないものでしょう。相手を納得させるだけの材料がなかったら徒労
に終わるし。

俺は背筋をのばし、もっともらしく答えることにした。

「俺の決意は変わりません」

「おいおい、長老がああ言ってるんだから、もう少し考えろ」

クレイが口出した。「返してやる」と言いながら、内心は返し
たくなかったようだ。だが俺は帰りたい。自分の気持ちはハッキリ
伝えよう。

気合い入れてクレイの意見を拒否しようとしたところ、さきに長
老が発言した。

「こら、トイチ様に対して、なんという口の利き方だ」

クレイは笑いながら肩をすくめた。

「そりゃどーも。なにしろ教養がないもので。しかしトイチ様のこ
とは尊敬しておりますよ？」

長老は沈痛な面持ちで、ため息ついた。

「これは粗雑だが心の正しい男です。許してやってください」

俺はあせって首を横にふった。

「いや、俺のほうが年下だし、別に気にしません」

「そうですか。さすが、お心が広い」

「い、いや……」

「で、お気持ちは変わりませんか」

「は、はい」

「わかりました」

長老はうなずき、手にしていた杖をかざした。持ち手の部分に王冠の形をした宝飾品がついている、金色の立派な杖だ。杖は黒い光を集め、放つ。

俺は目を閉じた。

見覚えのある通りに立っていた。通っていた高校の近くだ。書店があつて、ファミレスがある。夕焼け空の下。人通りはまばら。

誰にも見られてなかっただろうな、おい。返すなら家にしてほしかったが、つながっている場所が違うのだろうか。それとも使い手の意思の相違か、はたまた杖の性能か。

とにかく「帰って来た」！と歓喜の叫び声を上げたいところだが、まっさきにマントをはずした。こんな浮いた格好で歩いて帰るなんて、冗談じゃない。

マントをたたんで小脇にかかえ、俺は猛ダッシュで家に帰った。住み慣れた家。使い慣れた部屋。間違いなく元の世界だと確認して安堵のため息をつき、さっそく着替えた。クレイに買ってもらった服は、申し訳ないが衣装ケースの奥で永遠に眠ってもらう。ブーツは置き場がないので、とりあえずベッドの下につこんだ。

あとはケータイで日付を確認。大丈夫。二日しか経っていない。あさってから、いよいよ大学生活がはじまる。別にないもないだろうが、それでいいのだ。なにこともないのが幸福の基本だ。

こうして俺の日常は戻ってきた。いま平凡に大学へ通っている。ただ少し変化があった。街人のシカトにあわなくなったのだ。コンビニでも待たされず、同じ大学に通う者たちからも普通に挨拶される。いい変化だ。

というか、これが真の平凡だろう。平凡平凡いながら、非常識な日々が続きすぎてマヒしていたぜ。アブネーな。

まあ、それは置いて。

変化はまだある。母が週末にはメシを作って待っているようになったのだ。それにもない、父も上司や同僚の誘いを断って家に帰るようになった。両親と食卓を囲む機会が増えたのだ。

母は言う。

「あなたを大学にやろうと思って、母さん、ずっと仕事がんばってきたけど、お休み増やしてもらうことにしたの。こうやって家のこともできる余裕を持たなくちゃダメだと思って」

泣きそうになった。やっぱり親は親だ。無関心なように見えて、実は俺のことを第一に考えていたのだ。異世界で情緒不安定になっていたとはいえ、少しでも親の愛を疑ったことが恥ずかしい。

そうしてみると、ほんの一日か二日の出来事だったが、あれはい経験だったに違いない。これまで親や街に対していだいていた不満がいかにちつぽけだったのか、よくわかった。なので、これまでどおりでも文句は言わないつもりだったが？その状況は見違えるように改善されていた。うれしい誤算だ。

学食で一緒にメシ食う仲間もできたし、ゲーム機も買った。それだってちつぽけだが、俺の器にあった喜びだ。ずっと望んできた真の平和だった。

それから、五月、六月、七月と、月日はあたりまえに過ぎた。中二の秋からこつち、自分の身に起きていたことが嘘のようだ。

夏休みには自動車学校に通う。免許を取ったら数人の友達とレン

タカーでキャンプに行く予定だ。無論その合間にも、海行ったりカラオケしたり合コンしたりと、イベントめじろおしだ。

こんな楽しい人生が待っていようとは思っていなかっただけに、俺はかなり浮き足立っていた。ちよつと調子に乗っていたかも知れない。バイトして小銭を貯め、少しリッチな気分になったのも良くなかった。

なんにしても、異世界のことを記憶から葬り去ろうとしていたことでバチが当たったのかも知れない。まもなく夏休み突入という、その日。

悪夢は再び、やって来た。

カルテットによる序曲

いつものように大学へ足を運ぶと、門前に人だかりができていた。事故か事件でもあったのかと、人ごみをかきわけ中へ進む？？と、それは「いた」。俺は瞬時に凍りついた。そう、「いた」のは連中だ。

一、二、三、四？？きつちり四人。ワン、ツー、スリー、フォー、やっぱり四人。イー、アール、サン、スー……もういいだろう。

周囲のささやきに注意深く耳をかたむけると、四人そろって我が校に編入してきたということらしかった。

T大から桜井享。

エスカレーター式の私立校から佐藤海地、真部李幸、坂本里奈。

なにがあればそんなことになるのか、よくわからない。せつかくいい大学に……って、ヤツらにこっちの大学の善し悪しなど関係ないか。とにかく門前は、イケメン三人と美女一人の異様にめだつ四人組のせいで混み合っていたのだった。

いつとき事態を受け入れきれず茫然としてみると、沢垣ひろしが寄ってきた。大学で親しくなった先輩で、現在二十歳だ。容姿も内容も究極のフツメンで、俺にふさわしい友人である。先輩はうれしそうにして、耳打ちした。

「あの最強トリオと新学期から一緒だぜ！ スゲーな。なんだか鼻が高いぜ。あのもう一人、誰だろう。新メンバーかな？ T大から来たって噂だぜ？ トリオ解散してカルテットにでもなるのかな？

へへへ」

なにをのんきなことを言っている。あれは異星人だぞ。間違っても日本人じゃないし、たぶん地球人ですらない。異世界の定義がわからないから断言はできないけどな。そして内二名は、ああやって髪を黒くして日本人っぽくしているが、本当は金髪に銀髪だぞ。メダルならオリンピック優勝だ。

こうしてはおれん。逃げよう。なるべく目にかからないように。いや待てよ。なんで逃げなくちゃならないんだ。俺はもう関係ないはず。じゃあアイツら、どうしてここに？ この大学に本物が紛れていたとかいうパターンか？

……ウゼーな。とつとと連れて帰れ。そして目の前から消えろ。

憎しみを込めて祈っていると、桜井と目が合った。ヤツはニツと笑い、怒り心頭な目つきでズカズカと迫ってきた。

「まいったよ。まんまと騙された。今度こそ食らいについて離れないから覚悟しろ」

「な、なにっ」

俺が驚くそばから、佐藤海地も寄ってきた。

「王子だからって、口の利き方が横柄すぎるぞ。トイチ様をなんだと心得る」

「フレンドリーに接するのがミソなんだ」

「ミソを明かしてどうする」

「俺がリードしすぎているから、フェアにしてやったんだろ？」

「ふん。おごり高ぶりも、たいがいにしる」

「なんだとこら。国外追放するぞ」

「やってみろ。城から追い出されないうちにな」

……なんだコイツら。一緒に転校してきたくせに仲悪いな。いがみ合ったのは最初のあれだけかと思ったら、ガチで犬猿の仲かよ。しかしだからといって、公衆の面前でケンカはよくないな。しかも、なんか俺のせいみたいな流れだし。断っておくが俺は無関係だぞ、みなノ衆。いや、その前に台詞がそうとうオカシイ。誰か突っ込め。

だが二人はお構いなしに言い争った。

「残念ながら、俺が王位を継承できない場合は妹が継承する。妹は優しいから俺を追い出したりしないんだ」

「では今からすぐに放棄して王女にゆずるといい。そのほうが世のためだ」

「言わせておけば言いたい放題。たかが三銃士のくせに」

「ただ生まれただけで王子になったのと、血と汗と涙の努力をして三銃士の地位を得たのでは、どちらが素晴らしいかな？」

「俺がそのように生を受けたのは、ふさわしいからだ」

あー言えばこー言う。尽きそうもない罵り合いに俺はイライラして拳をにぎり、声を張り上げた。

「ストープ！」

すると周囲まで止まった。とたんに深閑として空気が張り詰める。かえって俺のほうが仰天してしまい、背中に嫌な汗をかいだ。

なんでこうなるんだ！

俺は腕を震わせつつ、ささやかながら抗議することにした。

「お、おまえらなー、もう俺のことは放つといってくれよつ。なんなんだ！」

「なんだとおっしゃられましても、あなたこそ、どうしてあんな嘘を？」

佐藤が言うことに、俺は眉をしかめた。

「嘘？」

「人違いだと」

「人違いだろ？」

「妖精の粉をつけなかった、という情報はすでに入手済みです。これ以上、言い逃れはできませんよ？」

「ぶほっ！」と俺はむせた。「クレーイー！」と心の中で絶叫したことは言うまでもない。チクルとは何事だ。救世主としてあるまじき行為じゃないか、と。

いやしかし、まだクレイと決まったわけじゃない。俺は気を落ち着けて再び佐藤に向いた。

「え、えーと、その情報は誰から？」

「保安官」

「保安官？」

「クレイ・ソウル保安官」

「ゲホゲホッ！」

今度はむせるどころか咳きこんだ。

クレーイー！ やっぱオマエか！ 保安官だったのか！ 学校行かなくてもなれるのか！

にしても、学歴関係なく実力さえあれば認められるというのは大賛成な気もするが、そうすると俺はますます隅へ追いやられるタイプだ。よかった。こっちに帰って来て。とりあえずチクツたことは大目に見よう。なにしろ返してくれた恩人だからな。心を広く持つのだ、河波斗一。

「そ、そそ、それで、俺をどうするつもりだ」

心の広さうんぬんとは関係なく不安に揺れながら尋ねると、佐藤がニコリ。桜井がニコリ。その背後で里奈と真部もニコリと笑った。「どこへなりとも、おともいたします。まずは鞆をお持ちしましうか」

と佐藤。

「バカヤロウ。鞆持ちは俺がすると決まっているんだ」

と桜井。

「いやいや、トイチ様の貴重品は僕が責任を持ってお預かりいたします」

と真部。

「じゃ、私は手をつないで歩こうかしら」

と里奈。

里奈の言葉だけは尋常じゃなく嬉しいが、待て。おかしな発言しないでくれ。見ろ、先輩を。目を丸めて硬直している。そして周囲は恐れおののきつつ、状況を見守っている。健全な学生が通う大学とは思えん光景だ。どうしてくれる。平凡で幸せだった、俺の学生生活。

ハッキリ言ってブチ切れた。ゆえに、低めの声でボソツとつぶやいた。

「鞆は自分で持つし、誰とも手をつながない。俺はおまえたちを心の底から信用していない」

トリオ改め、カルテットは石になった。

「信用???していただいてないのですか?」

「あつたりまえだろ! あんな森に置き去りにしやがって。いかに自分たちのことしか考えてないか少しは気づけ! 氷の入った桶に頭つつこんで反省しろ!」

力のかぎり怒鳴ってやった。俺にしては上出来だ。が……

カルテットは啞然とし、悲しげに顔をゆがませた。そして次の瞬間、驚くべき行動に出た。

「申し訳ありませんでした!」

と叫んで、いつせいに土下座!

俺は一転、青ざめた。そんなことをされたら、また取り巻きにボコられるかも知れないじゃないか。コイツらが勝手にやってることなのに。ひよつとして確信犯? なんにせよ俺は悪くない……と思う。そうだ悪くない。暴力なんか屈するものか。

俺は気合いを入れなおした。

「謝りやすむって問題じゃない。こっちは死にかけたんだぞ?」

言ってやった。そうそう。ゴメンですめば警察も保安官もいらないのだ。

「死にかけた!」

カルテットは驚いた様子で顔を上げた。俺は気圧されて後ずさった。イケメン三人と美少女一人が両膝ついた姿勢で目の前に展開していると、俺なんかオーラにのみこまれて消えちゃいそうだ。だが「負けない、負けないぞ!」と懸命に自身を鼓舞した。

「お、おう……」

意気込みとは裏腹に、自信なさそうな声が出た。相手もここで引き下がれないのか、もうひと押しだと思ったのか、再びいつせいに頭を下げる。

「誠に申し訳ございません!」

「もうやめなにか」と言いたい。おかしいだろ、この絵面。いつの時代の誰と誰だ。異世界にいるという自覚あるのか、おまえたち。

以前のように演技しろ。さも現代日本人であるかのように振るまえ。それとも、なりふり構っていられないほど切羽詰まっているのか？ そう問いたいくらいだった。

だけど人目がある以上、気をつかう。俺まで頭がおかしいと思われたくない。無難な台詞を探した。

「あ、あの、もういいから、そこどけよ。解散しろ解散。講義はじまるし」

うん、まずまずだ。ちょうどチャイムも響いた。

意図を察してくれたのか、カルテットはしぶしぶ立ち上がった。学生らも動揺しながらパラパラと散りはじめる。驚愕のあまり灰になりかけていた先輩も我に返った。先輩は上から下まで俺をひと通り眺めてから言った。

「な、な、なんだよ。おまえってスゲエ奴だったんだな。ごめんな、いままで。タメ口きいたりして」

いままタメ口だな。だがいいんだ、それで。先輩だろう？ なにを謝る。今の動揺具合なんかも完璧な凡人だ、沢垣。おまえは実質、俺のタメ以外の何者でもない。

おかげで平和な気持ちに戻れた俺が弁解しようとする、佐藤が言った。

「トイチ様のお世話は、これからは我々がする。ご苦労だったな。感謝しよう」

な、なに勝手に引導わたしてんだ！

が、先輩は佐藤に「感謝」されたことで、すっかり有頂天になっていた。さすが地元民。弱いな。あんな上から目線の感謝、俺なら唾つけて踏みにじってやるところだが。

さて、その日の夕方。訳もわからず付きまとわれるのは嫌なので、連中を図書室に誘い、これまでの経緯をザッと聞いてみた。カルテ

ツトは案外たやすく答えたので、まとめておこう。

ヤツらは精霊界というところの住人で、種族はヒューマン。だいたい千年ごとに一人の英雄がエレメンタルブレイカーというヤツから選ばれ、エンブレムをもらうらしい。このエンブレムには世を治める力があるとかないとかで、とにかく実権を握れるもののようなのだ。そしてなんととっても最大の魅力は、エレメンタルブレイカーから四大元素のイチの値の物質を、常に供給されることなんだと。それによって英雄は力と若さを手に入れるんだとか。不老不死みたいなことかな？ よくわからん。

さて、いかなる者であれ英雄に選ばれるには、まず勇者にならなければいけないということで、ヤツらは努力したようだ。多くのライバルを蹴散らし、踏み倒して勇者になった。あとは「最後の試練」さえ乗り越えれば、晴れて英雄である。

試練の場合は毎回エレメンタルブレイカーが選ぶという。いつ選ぶのかというと、前世の死の間際だ。つまり来世のことをあらかじめ決めてから昇天するんだな。それで今回は地球という星の日本が選ばれた。「イチ」の名を持つ者が有象無象に存在する場所だ。そこから、わずかなヒントをもとに見つけ出した者が勝ち、というわけだ。ところが、これには少し厄介なルールがある。

エレメンタルブレイカーは勇者としての直感で探らねばならず、確信をもつてつかまえるまでは直接そうであるかどうかを問うことができないというものだ。「英雄なら人を見極める目もあるはず」というところなのだろう。

俺に言わせりゃ、見つけてもらう気ゼロな気もするが、精霊界の人間はこちらの人間より第六感が鋭かったりするのだろうか。いずれにしても、残念ながら今回の勇者には素質がないようだ。今頃、本物のエレメンタルブレイカーは失望のため息をついていることだろう。

ちなみに俺が「人違いだ」発言をしたあと、こちらへリターンし

た連中は、「河波斗一くんは人畜無害な存在だ。我々にとっても良き幼なじみである。よってシカトや暴力など言語道断。普通に接してやってくれ」と宣言したそうだ。

なるほど。フォローはしてくれていたのか。帰って来たあとの生活が順調だったわけだ。ちよつと異常な宣言だが、連中のすることを奇異に思うやつなどいない変な街だから、よしとしよう。その前に肝心の俺を返してなかったけどな。どこか抜けてる連中だ。

ん？ 待てよ。宣言って、どんなふうにやったんだ？ 街頭演説風だったら俺はもう恥ずかしくて街を歩けないぞ。

なにげに連中の顔を眺めてみた。しかし、どういうわけか嬉しそうに顔をほころばせるので、とっさに目を背けた。

なんだろう、この空気。

とりあえず聞きたいことは聞いた。俺は座っていたイスから立ち上がり、鞆を肩にかけた。その様子に四人の視線が突き刺さった。

俺は座って話を聞いていたが、連中は俺の前に整列し、起立している状態で話をしていたので、視線は下向きから上へと移動した。礼儀を重んじての体勢だったのだろうが、かえって睨みつけられたように、おっかない。

「鞆はお持ちいたします」

またしても佐藤が言う。だが俺は無視した。

「事情を聞けば聞くほど俺じゃない。もっとよく捜せよ」
すると真部が反論した。

「我々は死にものぐるいで捜しました！ それでも、どうしても、あなたしか該当しないのです」

「違うって。俺がそう自覚してんだから、違うよ」

「では違うという証拠を見せてください。我々が納得いくように」
俺は啞然として真部を見た。「間違っていることの証明」なんて、どうやればいい。少なくとも俺の中では証明できている。だって違うんだから。心を形にして表せるものなら表したいものだ。

妖精の粉がつけば良かったのか？ じつは名前が違ったとか？

ありえない。だいたい何をもってエレメンタルブレイカーなのか、俺は知らない。イチの値の四大元素とやらを精製できなきゃいいのか？ わざとできないフリをしていると思われるのかオチだ。だって、ほかに違うという決定的な証拠を突きつけるすべもない。

俺は困ったあげく、

「とにかく、俺は違うから」

と言い捨て、急いで図書室を出た。

結局、夏休みに突入するまで似たようなやりとりが何度も続いた。かたくなに確信している連中といると、違うという自信が削がれていきそうで怖い。そんな恐怖心を振り払うように「違うんだ！」と叫んでみたところで、胸中の真実はなかなか相手に届かないものだ。ああ、俺がエレメンタルブレイカーじゃないと証明するものが欲しい。本物が出てきてくれるのが一番でっとり早いけど、向こうからはアプローチしないルールとなると期待薄だ。まったく妙なゲームをおっはじめたものだ。そんな陳腐なことをしなけりゃ英雄一人定められないのか、エレメンタルブレイカーさんよ。

だが嘆いても喚いても事態は変わらず、いよいよ夏休みがはじまった。明日からしばらく教習所通いだが、憂うつで身が入りそうもない。キャンプはいまのところ削除されてはいないが、あの影響力がある四人がいてはドタキャンも覚悟しておかなければならない。

俺は部屋の窓から、灼熱の光を降り注ぐ太陽と眩しいくらいにブルーな空を、忌々しげに眺めた。

オール・バイ・マイセルフ

いったい誰がこんなことになるかと予想しただろう。しなかったのは俺だけか。教習所に通おうとする第一日から玄関先にカルテット。どうやら「お迎え」というやつらしいが、いいかげんにしてもらいたい。

母は朝からテンション高めだ。もうすっかり乙女に戻ってキヤーキヤー言っている。

「まあ！ どうぞお上がりになって！ お茶でもいかが？」
そんなことを口走りながら、俺の腕をこっそり突ついた。

「なーに？ いつのまにお友達になったの？ ちっとも母さんに言わないんだから。あんたも隅に置けないわね！」

ふっ、隅に置けないのはアンタだ母さん。息子と同年の男どもに色目使わないでくれ。ま、一人は女の子だけど。

里奈の顔を見ると、彼女はちょこっと首をかたむけてニコツと笑った。

ま、眩しい。かわいいなチクショー。作り笑いだとわかっていても気持ちが悪くグラグラ揺れる。彼女が勇者だなんて、とても信じられない。しかしエンブレム獲得のため多くの強者と闘い、勝ち残ってきたんだよな。英雄に選ばれるためなら気のない男にだって愛想よくするってわけだ。

うーん。わかっちゃいるけど顔がにやけそうになる。エンブレムをやるかどうかという話とこれは別物だ。そもそも俺は無関係だし。どうせ俺がそれじゃないと分かったら手の平返したように無視するんだろう。だったら今は笑顔のサービスクらい受けてもいい。迷惑してるんだし。

俺は無言で靴をはき、一人でさっさと玄関を出ようとした。その俺を、母が慌てて呼び止めた。

「あ、斗ー！ これこれ！」

ふり向くと、母の手に長形四号の茶封筒がヒラヒラしていた。

「なんだよ」

「住民票。入校手続きにいるって言ってたじゃない」

「あ、そっか」

「落とさないでよね。それだって三百円よ」

「セコイ！」

俺は封筒を肩かけ鞆にしまい、「行ってきます」と言って玄関を開けようとノブに手を伸ばした。だが真部に先を越された。彼はスマートにドアを開け、「どうぞ」と笑顔。おまえは銃士より執事向きだな、真部。

その後カルテットは母に向かって「では息子さんをお預かりします」と頭を下げ、当然のようにして俺とともに教習所へ向かったのだった。

教習所へ向かう道中。カルテットが後ろからゾロゾロついてくるのを疎ましく思いながらも、俺はふと住民票が気になった。正確に言えば住民票より情報量のある戸籍謄本が気になったのだ。

めったに必要としないから見たことはないのだが、あつちは出生した場所や両親との続柄が明確に記載されているはずだ。それなら自分や両親の謄本を取って祖父母くらいからの家系を明らかにすれば、俺が間違いなく地球人だと証明されるんじゃないだろうか……なんて。

地球人の身体を介して転生したとか言われたらおしまいだが、してみる価値はある。というのも、桜井の妹が精霊界のヒューマンだと判明しているからだ。ヤツが後を継がなきゃ妹が継ぐつてことは、そうだな。なら、こっちに來ている両親もおそらく精霊界のヒューマンだろう。三銃士の家族構成については謎だが、奴らの両親だって十中八九、精霊界のヒューマンだと思う。だったら俺の両親が精霊

界のヒューマンじゃないと証明すればいいんだ。そうすりゃ俺も自動的に地球人。エレメンタルブレイカーじゃないと証明できる。

もつとも、あいつらが地球で生活するにあたって、そのへんの身分証明をどうやっていいのか不明だが？戸籍制度のない国から日本国籍取れば、どうにかならないこともない。

よっしゃ、解決の糸口が見えてきたぞ。

つか桜井。おまえんち王家だろ。城開けっ放しでいいのかよ。

ごちゃごちゃ考えている間に教習所に着いた。中へ入ると、入校手続きで並んでいた列がサーツと開いて道を作った。

モーゼ！

『モーゼ』っつーのは、エジプトのファラオに紅海まで追いつめられたヘブライ人を救済するため、杖をかざして海の水を割り、道を作ったという伝説で有名な、旧約聖書の登場人物だ。

「おや、まだ誰も並んでいませんでしたね。運の良いことで。さっそく手続きしてしましましょう」

さわやかに言っただけなのは真部だ。俺は虫酸が走るような思いでふり返った。

「それ本気で言ってるのか。俺、割り込む趣味はねえんだけど」

「割り込みだなんて人聞きの悪い。みなさん快く譲ってくださいなんですよ」

真部の笑顔は詐欺師のようだ。俺はウンザリした。

「やっぱ並んでたのは見てたんじゃねえか」

「細かいことは言いつこなしです。さあ、手続きを」

「……わかったよ」

出だしがコレだから、すでに察しはついてたが、教習所でのVIP待遇は凄まじかった。この調子だと、どこ行ってもこんなだろう。気分がいいのか悪いのか。俺はとにかく普通のことを望んでいたから、カルテットの差し金による異常待遇は眉間にしわ寄せも

のだった。

こんな俺にへりくだってまでカルテットに良く思われたいか、街人よ。俺も一時はそんな時期があったから理解できないこともないが、本性を見たあとなので納得がいかない。

どっかの皇太子でも迎え入れるような調子の入校案内やら何やらが終わったのは、十二時ジャストだ。肩が凝った。特別に用意されたいらしい教習所内の食堂の席で、俺は向かい合うカルテットを順に眺め、首をかしげた。

「どうしてこの街の住人は、おまえ達なんかをもてはやすんだろう」その席はセパレータで区切られている。座っているのは背もたれがあるダイニング用のイス。テーブルも木製で光沢がある。不自然なくらい新品だ。カルテットが事前に連絡して用意させたに違いない。そんな威力を行使できることが、俺には信じられないのだ。

カルテットは視線を交わしあい、皮肉げに笑った。

「勇者は英雄に選ばれるだけの素質を持ちます。英雄には民を惹き付ける魅力が備わるものです。そこから放たれるオーラによって、民は自然と憧れ従うのです。地球人は精霊界の者よりオーラの影響を受けやすいようです」

説明をくれたのは佐藤だ。俺は唸って腕を組んだ。

確かにコイツらが放つ存在感は半端じゃないが、精霊界が考える勇者像に大きな不信感が募る。地球人が想像するソレとは違うんだろうか。

俺が頭を悩ませていると、桜井が口をはさんだ。

「おまえはちつとも影響されないよな」

このひと言は、だいぶ意味深だった。俺がキョトンとして桜井を見ると、やつはニヤリと笑った。

「左右されないのはエレメンタルブレイカーだけ。これは常識だぜ？」

ぐおー！　なんだそれなんだそれなんだそれ！　俺がエレメンタルブレイカーだと疑える理由がそんなところにもあったのか！　く

そつ。最初に言つとけS王子！俺だつて昔はちよつと憧れていたんだ。そうと知っていれば、その旨を伝えまくつたのに。いまさら言つたつて信じてもらえねえじゃねえか！

それでも俺は、頭皮に大量の汗をかきつつ必死に言い訳を探した。「……い、いくら影響されやすいつつても、本性見れば誰だつて熱冷めるつて」

おお！結構うまいことフォローできた。

だが桜井はまたも不敵に笑んだ。

「普通はどんな醜態をみせても美化される。勇者や英雄の特権だ。それが通用しないなんて、エレメンタルブレイカーだと言っているのも同然のことだぜ」

俺は大きく目を見開いて桜井を見た。人生で初めて「ギャフン」と言つたかも知れない。

桜井はテーブルに腕をついて身を乗り出した。

「いいかげん白状しろ」

なるほど。ここはちよつと見てくれのいい取り調べ室だったんだな。じゃあセパレータで区切らないとな。あとは音声変えれば完璧だ？？て、冗談じゃない！

俺は頬を引きつらせながら無理に笑顔を作つた。

「腹へつたな。注文したやつ、まだかな？」

強引なそらし方だったが、カルテットは慌てて席を立つた。そしてまもなくトレーに載せたランチを持って戻つた。

「申し訳ありません。気がつきませんで」

真部が俺の分を目の前に置いて謝つた。ほか三名は自分らの分を手際よくテーブルに置いていった。

「冷めないうちに、いただきましよう」

佐藤が言つて、みな席についた。俺はうなずき、黙々と食べた。少しは開き直らないとな。勝手にそうだと決めつけているほうが悪いんだし。俺は何度も「違う」と断つてるんだし。これまでの腹いせに、こき使おう。

それにしても英雄オーラパワーときたか。都合のいい力だなあ、おい。どんなことしてもカッコ良く映るなんて、ふざけてる。どうせなら俺もそっちのがいいぜ。ライバルというには雲泥の差があるが、ハタからみてカッコ良けりゃ負け犬でもいいさ。

食事が終わると、また真部が素早く動いて食器類を下げてくれた。俺の世話をやく姿すらサマになっているのは、心底？執事？向きなのか、やっぱり英雄オーラの力なのか。

エレメンタルブレイカーだと勘違いされているだけの俺には、なんの力があるんだろう。何に向いていて、どうすれば最善なのか。

……もつとも今は、コイツらから逃れることが最善だと思うが、相当むずかしそうである。

俺はイスから立ち上がり、セパレータで区切られた空間から出た。そこで携帯からメール着信音が聞こえたので、取り出して見た。先輩の沢垣からだ。

？これから井上たちとカラオケ行くけど、来るか？ 来るんなら、いつものところだからヨロシク？

俺は急いで返信した。そしてカルテットに言った。

「俺、これから先輩と会うから、ついてくんなよ」

だが案の定、佐藤が文句を返した。

「そんな。我々もお伴します。決してお邪魔はいたしませんから」
「いやいや。おまえたちは「いる」だけで邪魔だっつーの。わかってねえな。」

「ついて来たりしたら今後いっさい口利かないぞ」

無性に腹が立って言い捨てると、さすがに四人とも沈黙した。俺は有無を言わせない勢いで踵を返し、教習所をあとにした。

教習所を出た足で俺が向かったのはカラオケルームじゃない。市

役所だ。自分の戸籍謄本を取りに行ったのだ。もちろんカラオケへは行くつもりだが、思い立ったら吉日である。これ以上カルテットに縛られてはいけけない。こんなことが日常茶飯事では、いざつて時に普通の生活に戻れなくなる。一刻も早く「俺はエレメンタルブレイカーじゃない」と突きつけられる証拠が必要だ。

そうとも。この時の俺はただ、平凡で自由な青春を満喫したい一心で、紙切れ一枚にすがっていた。それなのに……

戸籍謄本と睨めっこしながら市役所を出た俺は、確実に青ざめていたと思う。紙面にありえない文字が踊っていたためだ。

『養子縁組日』平成○年□月 日

『養父・河波正』
かわなみただし

『養母・河波良子』
かわなみりょうこ

ちょっと待ってくれ。誰でもいいから「これは何かの間違いだ」と言ってくれ。俺が証明したかったのは、こんなことじゃない。

紙を持つ手が震えた。体中の血が沸騰して顔が熱いし、もう泣きたい。

生まれてこのかた一度も実の親と信じて疑わなかったあの両親が養父母だったなんて、本当にありえないことだ。足元にある確かなものが音を立てて崩れていくような錯覚???めまいを覚える。

俺は「誰」なんだ。

そんな疑惑が胸の奥底から沸き上がった。

俺は書類を鞆へ乱暴に突っ込んで、道路を渡ろうとした。あまりにショックで、周りは見えていなかった。

次の瞬間、耳元で響くブレーキ音にハツとした。トラックの正面が見えた。そして暗転。

ギョツとつむった目を再び開けると、広い畑の真ん中に突っ立っていた。あたりにはオレンジ色のカボチャがゴロゴロ転がっている。ハッピー・ハロウィン。

そんな単語が浮かんだりしたが、陽気にはなれなかった。シヨツクを受けている真っ最中だし、この唐突なシチュエーションに嫌な予感がする。

俺が見てないところでカルテットが杖をふったのだろうか。ありえるな。なんだかんだ言いながら、俺を付け回していたに違いない。フェアリーの長老に頼めば帰ることができると思うが、車に轢かれるよりマシだと思えるが、あんまりナイスな機転じゃないよな。助けるなら普通に助けてほしかった。

俺はため息ついて、ボチボチ歩いた。畑の向こうに民家が見える。デッカイ平屋だ。畑の持ち主の家だろう。

どうか話のわかる人間が住んでいますように。

そんなことを祈りながら、歩いて行った。

「すみません。道に迷って困っています。誰かいませんか？」

玄関先に立って、木の戸を叩いた。

よもや物語につきもののワンシーンを現実にやろうとは。

「どなた？」

戸の向こうから返事があった。女の子の声だ。ラッキー。厳格なおヤジ声が返ってきたらどうしようかと思っていたが、これは幸先がいい。

「あの、俺、カワナミっていいいます。道を教えてもらえたら思っています」

戸が少し開いた。その隙間からクルツとした目がのぞいた。栗色の瞳で、髪はストレートの金髪。半分しか見えていないが、十六歳かそこの少女だとわかる。服装は開拓時代のアメリカ人みたいだ。なかなかカワイイ。

「ヒューマン？」

少女の眉がゆがめられた。彼女の耳は尖っている。フェアリーだ。やっぱ俺は運が悪いのかな？　だがフェアリーの長老に用があるんだから、これでいいんだ。

「道を聞きたいだけなんだ。ダメかな？」

なるべく優しい声で問いかけた。少女はスツと戸を開いた。心を許してくれたのかと、俺がホツとしたのも束の間。

ゴツ……！　と背後から鈍い音がした。それは俺の頭が棒のようなもので打たれた音だ。俺はふらつき、地に手をついた。

「この野郎！　なにしに來やがった！」

若い男の聲がした。しかし俺には振り向く余裕もなにもありやしなかった。頭部の痛みを必死に堪えていたからだ。

「兄さん！　この人は道を尋ねに來ただけよ！」

少女の聲が響く。すると男が言い返した。

「バカだな！　ヒューマンにロクな奴なんていないんだよ！　信じるんじゃない！」

同感だ。俺が知る限りの精霊界のヒューマンは、確かにロクなものじゃない。

そこへ男の蹴りが腹に入った。この蹴りは最高に利いた。俺は完全に転がって、意識が薄れていくのを感じた。

「ヒドイわ兄さん！　無抵抗の人に乱暴するなんて！　死んじやつたらどうするの！？」

「このくらいで死なねえよ。それより鞆、没収してどっか隠しとけ」「どうして？」

「人質みたいなもんだよ。返して欲しかったら言うこと聞くだろ」

「聞かなかつたら？」

「そんなときやそんな時さ」

目を開けると木造の屋根と梁が見えた。壁は白い漆喰。身体はべ

ツドに横たわっている。頭はズキズキするし、腹には鈍い痛みが走る。

「ゴメンなさい」

不意に声がして横を向いた。さきほどの少女がタオルを絞って額に乗せてくれた。どうやら俺は気絶していたらしい。

「ヒューマンなんかに謝るな。こんなところ、うるついているのが悪いんだ」

少女の後ろから声がした。俺を殴った男だ。どんなヤツに殴られたのだろうかと思って視線を送ると、少年だったので驚いた。茶髪に栗色の瞳。少女とよく似た顔立ち。十七くらいだろうか。

相当ヒューマンに偏見があるようだが、なにがあった少年よ。

少年は妹を押しつけ、ズイツと寄ってきた。

「保安官を呼んだ。けどここは辺境にある。来るまでに最低二週間かかるから、それまでは、みっちり働いてもらうからな。持ち物もこつちが預かる。文句は言わせないぞ」

ああ、例の人質だな。悪いが、たいしたものは入っていないから質にはならないんだ。教本と問題集とペン、それにわずかな金と戸籍謄本?? いっそ鞆ごと燃やして灰にしてくれ。

お、それより保安官呼んでくれたのか。ありがとう。お礼にいくらでも労働いたします。

俺は起き上がれないながらも、頭を下げた。

「あ、ありがとう」

その行動が奇妙だったのか、少年は変な顔をしてそっぽを向いた。「仕事は明日からだ。服はオレので間に合いそうだから用意してやる。そんな変な服で外に出るなよ、いいな?」

またしても拒否られたか、プリントシャツ。ボトムスはカーゴパンツでこちら寄りのデザインだからセーフだろうけど。

翌日。

俺はTシャツを脱いで、用意された服を着た。紺のノースリーブのハイネックだ。ベージュ色のマントもつけた。ここはフェアリー自治区内らしい。『フェアリーが住んでいる』イコール『フェアリー自治区』ではないだろうと思っていたが、案外イコールなのかも知れない。

軽めの朝食をすませたあと、俺は少年と一緒にカボチャ畑に出た。「この畑にあるヤツ全部収穫な。がんばれよ」

少年は無造作に言った。「がんばれよ」の部分に丸投げ的空氣を感じる。

「え？ 一人で？」

思わず聞いただと、ギロツと睨まれた。

「文句あんのか？」

「いや、ないけど」

俺は遠くを見渡した。広い畑だ。向こうの端が霞んで見える。一日二日では終わりそうもない。こりや骨が折れそうだ。グズグズしていられそうもないので、さっそく収穫にかかろう。

「これは食用？ それともランタン？」

ハサミでパチンと茎を切りながら尋ねると、少年は片眉をつり上げた。

「家畜のエサだ」

かーちーく？ カボチャ食う家畜って、どんなんだ？ なんかいるだろうけど思いつかないな。

「自分らは食べないのか？」

人畜兼用かと思って聞くと、少年は憤慨した。

「なんでだよ！ バカにしてんのか！」

「や、してないけど。そっか、家畜オンリーの食料なのか。なんか結構つまそうなのに、食わないのはもったいないな」

「も、もったいないって……」

少年は戸惑い、「うえっ」というような表情を浮かべた。が、急に意地悪そうに笑った。

「じゃあ、おまえ食ってみろよ。どうせ分けてやる食料なんかないんだし、それですむなら、こっちも助かる」

おっと、そうきたか。でも大丈夫。カボチャの調理法は心得ている。両親不在の日が多くて、たまに自炊してたしな。

「わかった。そうする。あ、でも鍋とか包丁とか調味料は貸してくれよな」

あっさりと受け入れた俺に、少年は目を丸め、たじろいだ。

「変なヤツ」

少年は言って踵を返し、家の中に入っていった。

気持ちはわからないでもない。「家畜のエサを食う」ということが、どんな侮辱にあたるかくらい想像がつく。俺の「食べないのか」発言に、少年も肩を怒らせた。しかし俺にはカボチャにしか見えないうし、こちらの常識などどうでもいいことだ。今はこの時をしのいで地球に帰る。それしか考えられない。食い物なんて食えたらいいんだ。

その晩さっそく調理場を借りて、煮付けを作った。醤油つぽいものがあつたからだ。ダシと醤油があれば、たいていの日本人は生きてゆける。あとは肝心のカボチャだが……

ひと口食って、俺は感動した。絶品栗カボチャだったからだ。

「は、うまい！」

そんな俺を見て、兄妹は仰天した。

「そんなに美味しい？」

と少女が聞く。俺は大きくうなずいた。

「うまいよ？　なんで？」

「だって、それは普通、そのまま砕いて家畜のエサになるのよ？　そんなふうに調理して食べるなんて、不思議」

「俺が生まれ育ったところでは普通だけど」

「え？ そんなに貧しいの？ ヒューマンの領土って、どこも豊かだと思ってたわ」

なんだその引っかかる台詞。ヒューマンの領土はどこも豊か？

「フェアリー自治区は豊かじゃないのか？」

素朴な疑問をぶつけると、兄が憤って怒鳴った。

「豊かな土地は全部ヒューマンが奪ってったじゃないか！ ここだって、作物が育つまで肥やすのに何百年費やしたか……！」

うおーっ！ なんか凄惨な歴史が見え隠れするぞ。まずーい！

しかし、そらしてしまうのはもっとヤバイ気がする。慎重になろう。
「フェ、フェアリーって虐げられてんのか？」

「そうだよ！ 昔ほどじゃないけど。てか虐げてるほうは自覚ないのか！」

「お、俺はそんなつもりないよ。どうしてそうなってるのか知らないし」

「え？ 知らないのか？」

「勉強不足で」

「ふん、どうだか。自分たちに都合の悪い歴史は伝えられてないんじゃないか？ ヒューマンのやりそうなことだぜ」

ひ、ひねくれてる。少年が口にする台詞にしては辛辣だ。これは、よほどのことがあったに違いない。そもそも学校にも行かないで力ボチャ畑を管理していること自体おかしい。どうなってんだ、この世界。十五くらいで成人とか？ だったら俺スゲエ大人じゃん。プレッシャーだなあ。

俺は深呼吸した。二度あることは三度あると言っからな。こうたびたび飛ばされるのであれば、多少はこちらの常識も学んでおかないといけないことに気がついた。だから思い切って聞くことにした。
「じゃあ、そういうことにしておいて、教えてもらえないかな？」

その夜、俺は眠れなかった。彼らの歴史は前に見た本の挿絵が示すものと同じだったからだ。

フェアリーは昔、とても小さかったらしい。地球人が想像しているとおりの姿だったのだ。魔力を持ち、自然と共存し、豊かに暮らしていた。だが木こりに見つかってしまっただけから世界が一変したという。木こり「ヒューマン」は、フェアリーをカゴに閉じ込め、彼らの力をいように使ったのだ。

フェアリーは逃れられなかった。ヒューマンが秘宝石を持っていったからだ。精霊界にたつたひとつしかないというこの宝石は、フェアリーを従わせる力があるのだとか。

それでもフェアリーは抗った。ヒューマンに虐げられ、こき使われる毎日に辟易し、反旗をひるがえしたのだ。だがヒューマンは報復とばかりフェアリーの森を焼いた?? たくさんのフェアリーが死んだ。

絶体絶命に追い込まれたフェアリー。そこに現れたのがエレメンタルブレイカーである。ヒューマンでありながらフェアリーの味方だったという人物。彼は強大な力でヒューマンから秘宝石を奪い、エンブレムに封印した。そしてカゴから解き放つため、フェアリーの身体を大きくしたのだ。

彼の強大な力とは、例の『イチの値の四大元素』である。この『イチの値の四大元素』というやつは、万能ともいえる力を発揮するらしい。秘宝石を封印し、フェアリーを大きくしただけではなく、何の価値もない痩せた土地をも蘇らせたのだとか。まあ、さすがに土地は規模がデカイから数百年費やしたらしいが……なるほど。すげえな『イチの値の四大元素』。カルテットも喉から手が出るほど欲しいわけだ。

そんなこんなで、エレメンタルブレイカーが味方について形勢が逆転したフェアリー。だが、いかに味方してくれようとエレメンタルブレイカーはヒューマンだ。彼の同胞に復讐することをためらっ

たフェアリーは、ヒューマンと条約を結ぶことで決着をつけたという。

条約とは以下のことだ。

『ヒューマンはフェアリーを支配してはならない』

『フェアリーの力を必要とする時は、その資格を持つ者が協力を仰いで借りること』

『資格はフェアリーを支配するエンブレムを手にした者にのみ与えられる』

『エンブレムは心正しきヒューマンにのみ与えられる』

これはフェアリーに害をなさない者という意味だ。ゆえに？

『そのヒューマンは英雄として選ばれる必要がある』

『選ぶ者はフェアリーの救世主・エレメンタルブレイカーのみである』

俺はため息ついて寝返りを打った。考えれば考えるほど、なんでそんな偉人と間違われているのか分からないのだ。

それにしても、石を投げ合うほど陰悪な仲じゃないと思っていたのは誤解だったな。あの時は保安官がいたし、礼拝堂の前だったから、みんな抑えていたんだ。俺だってフェアリーの立場なら、後ろから頭どつきたくなるもんなあ。やれやれ。

兄妹の世話になってから一週間が過ぎた。この頃になると少し打ち解け、名前を教えてもらえた。兄のほうはティム、妹はローザだ。妖精らしい名前だと勝手に思った。ティムとローザ、なんかメルヘンだ。

飯といえは相変わらずカボチャばかりで少々飽きてきたが、煮付け、バターソテー、コロッケ、グラタンなどなど、がんばればレパートリーはある。

家畜のエサをあれこれアレンジするのが珍しいのか、ティムとローザは新たなメニューが出てくるたびに興味津々で眺めていた。決して口にしようとはしなかったが、「おいしそう」とは言ってくれた。

「このあたりに住んでるのは、君たちだけなのか？」

俺の質問に、ティムとローザは黙ってうなずいた。なんだか、しみりしてしまった。十代の若さで兄妹二人、こんな人里離れた場所で暮らしているのが気の毒だったのだ。いくら家がデカくて土地が広くでもなあ。

「そりゃ寂しいし不便だな。俺が力になればいいけど、俺じゃあな。役に立てなくて本当に申し訳ない」

俺が頭を下げると、ティムとローザはまた驚いた。俺がすることに、いちいち驚く二人？？反応が純粹で心洗われるようだ。こんな弟や妹がいたらいいかも知れない。

前略。父さん母さん、養子増やしませんか？

「ヒューマンって、いけ好かないヤツばかりだと思っていたけど、そつでもないんだな」

ティムがそう言ってくれた時は、正直うれしかった。俺が笑うとティムもローザも笑った。こういうのを「ふれあい」って言うんだろ。なんだか別れが惜しくなってきた。地球に戻れば、またあのカルテットと付き合わなければならぬ。そう思うと心が荒む。

ふつ、いつそこに住もうかな。いや、それじゃ二人に迷惑か。

この世界のヒューマンってのも嫌だし。スゲエ印象悪いもんな。

そうこうする間に日は過ぎ去り、カボチャの収穫を終えて残った蔓の始末にかかっていると、隣人が訪ねてきた。隣人といっても二キロ先の集落の男だ。役付で定期的にティムとローザの様子を見に来ているらしかった。幼くはないが子供といえる年頃の兄妹を放っ

ておいては、自治体的にマズイからだろう。

その隣人は俺を見て渋い顔をした。

「保安官に預けるまで、こき使ってるんだ」

ティムは言ったが、隣人は黙って帰り、翌日に大勢の村人を連れてやって来た。俺はひどく嫌な予感がした。

「ごめん。オレ、フオローしたつもりなんだけど」

ティムは動揺して言った。俺は「おまえのせいじゃない」と慰めた。

ティムによると、ヒューマンを殴りたいという衝動はフェアリーに根強くあるらしい。無論、報復は法的に認められていないので公然とはやらない。だが陰に隠れてやる暴力というのは存在するのだ。したがって、こういう辺境の地にヒューマンはやってこないのだという。法の目が届かないからだ。

「ここでヒューマン一人殺したって、ヒューマンに殺されたフェアリーの数には全然届かない」

村人はそう吐き捨てた。

殴りたいだけならカワイイものだ。彼らのそれは殺気だった。俺が感じた恐怖は計り知れない。手に農具を持った男どもに囲まれた時、もう死んだと思った。カボチャ畑で殺害されるとは……妙な気分だが、どう考えても笑い話にはなりそうもない。

じりじりと距離を縮めてくる村人。恐怖で喉がカラカラの俺。そして高らかになるラッパ。

……ラッパ？

「者ども！ 散れ！」

突然の怒号とともに、ラバのようなラクダのような牛のような鹿のような馬に股がつた男が、ベージュ色のマントをひるがえし、集団に突っ込んで来た。村人は驚き、慌てふためきながら散る。村人を蹴散らした張本人も相当あせっていたようで、飛び降りながらよるめいた。そして俺の前に片膝ついた。

「無事か？」

クレイだった。ラッパはおそらくパトカーのサイレンと同じような役割のものなのだろう。その手に固く握られていた。

クレイの急な登場と、間一髪救われたという思いで、俺の頭の中は真っ白だった。だから何を問うでもなく突っ立っていた。するとクレイが俺を見上げて言った。

「おい。こっちは保護されたヒューマンがカワナミだって聞いて、飛んで来たんだぜ。なにか言うことはねえのか」

口の悪さは相変わらずだが、安心した。緊張の糸が切れて、俺は地面にへたりこんでしまった。そしてヘラツと笑った。

「ハハツ、水飲みたい」

これにはクレイも笑った。

「またかよ。いつも喉が渴いてんだな」

クレイは立ち上がり、村人を見据えた。

「トイチ様が水をご所望だ。誰か持ってこい」

今度は村人が縮み上がる番だ。この世界で？イチ？がつく名前は、かなり破壊力がある。

「トイチ様だつて！？　じゃ、コイツが……、いや、この方がエレメンタルブレイカー？　た、大変だ！　こうしちゃおれん」

というわけで、急遽ティムとローザの家に集まった村人は俺に平謝りした。殺そうと思っていたヒューマンがエレメンタルブレイカーだったというので、尋常じゃなく泣きわめき、後悔しながらの土下座である。

俺とクレイはイスに座って、その光景を眺めている。どうしたもんだろう。

ティムとローザはしばらく茫然としていたが、今は部屋の隅っこで、おとなしく正座している。顔を紅潮させ、目をキラキラさせながら。

悪いが、俺は目をそらさせてもらった。羨望の眼差しを向けられることに慣れていないのだ。しかもエレメンタルブレイカーじゃね

えし。なんか良心が痛む。だがこの場を無事にやり過ごさねばならないので、当面はエレメンタルブレイカーで通させてもらおう。

「本当に……！ 本当に申し訳ございませんでした！」

ああそつだ。とにかくさつきから、しつこく泣いて謝る村人をどうにかしよう。

「あの、もういいから。それより俺、クレイと話がしたいんだけど」「ははっ！ どうぞ、我々にお構いなく！」

うーん。立ち退いてくれないと「お構いなく」とはいかないんだが、しょうがない。

俺はため息ついて、クレイに向いた。

「長老に頼んで、も一回、戻してもらえませんか」

クレイは真面目な顔で、俺を見据えた。

「それはできない」

「……え？」

「あっちへ行くには、こっちに帰った方法と同じでなきゃならないん？ どういうことだ？」

「え、ええっと、もうちょっと詳しく」

「前回は杖の力で戻っただろう？」

「あ、はい」

「今回は道具なしだ。ここへ来る前に念のため長老の力を借りて、どういう経路で舞い戻ってきたのか確認してきたから、間違いない」
手抜きねえな。さすが実力オンリー保安官。

「それで？」

俺が首をかしげると、クレイはビシッと言った。

「おまえ、自力でこっちへ飛んだんだ。だから、あっちへも自力で行くしか方法はない」

……しばし目が点。そして俺は絶叫した。

「なぬー！！」

オール・バイ・マイセルフ（後書き）

「引き」がマンガとか言わないの！

長老の娘

「道具も使わず異世界を移動するなんて、さすがエレメンタルブレイカーだな」

クレイはニヤニヤ笑いながら言った。

誤解だ。つか、なに？ カマかけてねえ？ 叩いてもなんも出ねーぞ。それに道具とかなんとか言ってもアレだろ。一度あつちこっちを往復すると癖がついちゃうんだろ？？妙な癖がついちゃったな、おい。

俺は深いため息をついて、しばらく頭をかかえた。

自力かあー。キビシいなあ。どうやってすりゃいいのか分かんねえし……また車に撥ねられそうになればいいのか？ ヤダな。失敗したら死ぬじゃん。つか車とかあんのかココ。馬車？

「とにかく、しばらく厄介になる場所を考えたほうがいい」

クレイの言葉に、俺は顔を上げた。

「受け入れてくれる先なんてありますかね？」

「ハハハッ、おもしれえこと言うな。エレメンタルブレイカーと言やあ、俺たちには神様も同然だ。受け入れ先なんて山ほどあるぜ」
ワハハ、マジかよ。俺バチ当たりそう。

「と言つても、うかつな所へは預けられねえ。それ相応つてもんがあるからな。とりあえず俺と来い。長老に相談して、ヒューマンの王族に話を持っていく」

俺は思い切り顔をしかめた。

ヒューマンの王族というと桜井ん家のことだよな。あー嫌だ。アイツ一人だけでも嫌だが、もれなくついてくる三銃士も嫌だ。まあ話なんか持つていかなくても半月も不在にしてんだ。こつち来てんのバレバレだろう。あいつらも来てんじゃねえか？ いずれ否が応でも会うよな。

フウツと息をつく俺を、クレイは眉をひそめて見つめた。

「どうした？」

「え？ あー、いや、会いたくないなあと思って」

「誰に」

「王子と三銃士」

「ああ？ あいつらは仮にも勇者だろう。会いたくないってのは、
どういう了見だ」

「いろいろありまして」

「いろいろねえ……まあとにかく、一度は長老んここで世話になる
だろう。何か考えることがあるなら、そこでゆっくり考えりゃあ
いい」

俺は間を置いて慌てた。

「ちよ、長老つて、もしかしくなくてもフェアリーで一番偉い人です
よね？」

「おう」

「そんな偉い人ん家で厄介になるのは気が引けます」
緊張しすぎてストレスで胃に穴が開く。まだ四十代くらいなのに
威厳たつぷりだったしなあ。ありや絶対なんかやってるよ。武道の
達人とかだ、きっと。居候なんかしてボロが出たらどうする。ただ
じゃすまないような気がするぜ。

だがクレイは、おかしそくに笑った。

「なに言ってるんだ。その長老より偉いくせによお」

「ぶーっ！ そーなの？ やばーい！ 逃げられなーい！ そんな
らさつさとカルテットに連れてかれたほうがマシじゃねえか？」

「ああ、なんか嫌な汗出てきた。ちよっと思考ぶち切ろう。今はな
にも考えまい。どっちにしても一度は長老んところに行かなきゃなら
ないんだ。いざとなったら全責任はカルテットに押し付けよう。も
ともと奴らの責任だ。」

というわけで俺はクレイに連れられ、例の動物??ドルーバというらしい??に乗って、およそ二週間の道のりを旅することになった。行く先々で歓迎されたが、そのたびに良心が痛んだのは言うまでもない。彼らが歓迎しているのはエレメンタルブレイカーであつて、俺じゃない。本当に申し訳なくて、

「恨むんならカルテットだぞ！」

と叫びたかつたが抑えた。そして東へ東へと進んで行つた。道中に考えたのは、相変わらず小さいことだつた。

ティムとローザの所で世話になつたのが二週間、この旅が二週間だとすると計四週間で、ざっと一ヶ月は経過したことになる。通つてゐる大学の夏休みは八月一日から九月末までの二ヶ月なので、半分が終了したのだ。悲しい。そしてちょうど中間の八月三十一日は誕生日である。十九になつた。異世界でハッピーバースデイとはなそんなこともあり、休憩するために寄つた喫茶店のような所でティムから返却された鞆をのぞき、クシャクシャにした戸籍謄本を広げてみた。養子縁組をした日付は九月七日。生まれて一週間ですよにやられたつてことは、望まれずに生まれたか、母親がシングルマザーのうえ、お産で死んでしまつたか……考えられるのはそのくらいだ。

俺は憂うつになつて紙をしまい、そのとき手に当たつた金属質のものを取り出した。ケータイ電話。

やつべー！ 鞆に入れてんの忘れてた！ 灰にされなくて良かったよ。つーか先輩、怒つてねえかな？ カラオケ行くとか言つて、すっぱかしちやつたぜ。しかも一ヶ月音沙汰なして??そろそろ搜索願とか出てんじゃね？

俺はまたも暗い気分で電池切れのケータイを鞆に突っ込んだ。

それから昼食をとつて、再びドルーバに股がること数時間。以前に訪れた街へ到着した。ここでドルーバは関所へと預ける。街中は徒歩限定だからだ。関所をくぐると右手に用品店や雑貨屋、クレイ

に衣装をそろえてもらったことのある服屋などが立ち並んでいる。

前は疲労と動揺で詳しく観察する余裕がなかったが、今回はじっくりと街並を眺めた。関所付近は商店で占められているようだ。行き帰りになんか買ってけつてことだろう。そして住宅は中央広場付近に密集している。木々が生い茂っているので分かりにくいが、よく見ると結構な部屋数を誇るアパートらしきものがあった。

それにしても、なんだろう。今日はやたらシンとしていて、人っ子一人見当たらない。

なんて思っていたが、やがて礼拝堂が遠目に見えてくると、ちょっとした異変に気づいた。俺はにわかには立ち止まり、クレイに確認した。

「な、なんか人ばかりが見えますが……祭でもあってるんですか？」
クレイはふり返って人が悪そうに笑った。

「エレメンタルブレイカー様のご訪問となりや、お祭り騒ぎにもなるさ」

ぐえっ！俺さらし者！？

しかし行かないわけにもいかない。俺は重い足を引きずって、どこにかクレイについて行った。そして人垣が作る道に差しかかると楽隊が音楽を奏で始めたのにビクついた。人々の手からは紙吹雪がまかれる。華々しい音楽と紙吹雪と歓声。うつすらと頬を染め、笑顔と興奮の眼差しを向けてくるフェアリーたち。

は、恥ずかしい。こういうことに耐性のない自分の凡人っぷりが憎らしいくらいだ。猛ダッシュして通り過ぎたい。実際の距離は五十メートルほどだと思いが、もう一キロも二キロも歩いた気分だ。神経が擦り切れる。

礼拝堂の階段まであと少し。もう限界。目の前がかすんできた。ヤバイ。

そう思ってギョツと目をつむると、急にクレイが止まったので背中につかった。

「うわっ」

「おっと、大丈夫か？」

俺は一步下がってクレイを見上げた。……やっぱりデカイ、と改めて思った。一八五センチ以上はあるだろう。そんだけあってゴリくないって反則じゃないか？　なんか並んで歩くの嫌になってきたぜ。世話になるから仕方ないけど。

と、そのままクレイの肩越しに視線を投げて、俺は絶句した。

超力ワイイ女の子がいたからだ。率直に言おう。超力ワイイ女の子がいる。あれ？　二回言った？　まあいいや。とにかくカワイイ女の子がいる。

真っ白い髪に若葉色のつぶらな瞳。髪は肩の少し上のところで、ふんわりと内巻きにしている。童顔？？なのかな？　アメリカ開拓時代風の衣装はローザのよりずっと大人っぽい。でも見た目は十六七歳くらいに見える。

……うーん、いまいち判明しないが、おおざっぱに見積もって十六から二十歳までのどっかだろう。肌は透き通るように白くて、清楚で激力ワ。人それぞれ好みはあるだろうが、俺の中では里奈を超えた。もう心臓が弾けるほどの衝撃を受けた。

「おい、本当に大丈夫かよ？」

再度クレイに聞かれた。ポカンとしてみとれているのは自覚しているので仕方ない。だが同じ男なら、そこは察しろ。察して無視しろ。かつ、さりげなく紹介しろ。

しかしクレイは察しなかった。

「おい？」

「はひ？」

変な声で返事したのもスルーしてくれ。体裁なんか構っていられないんだ。俺は今、身も心も彼女に奪われ中だ。さっきまでの羞恥も吹っ飛んだ。それなので、クレイの背中も遠慮なくバンバン叩いた。ついでに敬語も忘れた。

「誰誰誰誰！？　前はいなかったじゃん！」

彼女は礼拝堂の階段の上、入口の前にいる。主体的に俺を出迎え

てくれている様子だ。このあとの展開にかなり期待が持てるんじゃないだろうか。

テンションが上がってる俺を見て、クレイは苦笑いした。

「長老のご息女だ」

「……」

なんだって？ ちょうろうって、あのチョーローですか？ 威厳たっぷりですミドルな彼ですか？ ですよー。

うっはー！ キツイ！ 恋愛に発展しなくてもデートに誘うくらいできるかと思ったが、世の中そんなに甘くないか。ヘタにちよっかい出したら「お父様」に首と胴体斬り離されそう。

「ようこそいらっしやいました。カワナミ・トイチ様」

身震いしているところ急に声をかけられて、俺はハッとした。ご息女の声は、台詞とは裏腹に凍てついている。

なんだよ。俺、第一印象悪い？ ？？悪いよな。エレメンタルブレイカーなんて偉人だったら、もっとカッコイイやつ想像してたりしたんじゃないだろうか。だとしたら完全に失望させたな。くっそー。つかエレメンタルブレイカーじゃねえし。まったくもう。これで本物がイケメンだったら世を呪うぜ。

「今日は父が不在ですので、代わりに私がお部屋をご案内いたします」

「どこ行つてんだ？」

「トイチ様のことをご相談しに、ヒューマンの王宮に赴かれたのですわ。じきに勇者を連れて戻られるでしょう」

クレイが気安く尋ね、ご息女が素っ気なく答えた。クレイは肩でため息をつき、頭をシャシャツとかいた。

「トイチ様は勇者にや会いたくないんだとよ」

「あら……」

ご息女は軽く眉をひそめた。そして、
「ニセモノだと見破られるのが怖いのかしら」

と突然の冷笑とともに、ひとこと発した。俺は石になった。

うひょー！　もしかして真贋を見分けられんのか、このお嬢さん。コエー！　あ、でも待てよ。それなら俺がエレメンタルブレイカーじゃないってカルテットに証明してくれないかな？

俺はかすかな希望を抱きかけた。が、クレイの言葉がそれを打ち消した。

「ハハハッ、そりやねえな。こいつは今までのヤツと違う。勇者にやとつくの昔に会ってる。しかも、そうとう熱心に追っかけられるみたいだぜ？」

ご息女は複雑な表情をしたあと俺を見つめ、クレイに視線を移した。

「……悪い癖だわ、クレイ。そうやって期待させるのはやめてちょうだい」

ご息女は背を向けてエントランスに入った。クレイは俺をつれて、それに続いた。

なにがなんだか分からないが、クレイの余計な発言により、俺の浅い計画は立つ前に死んだ。それにしても気になるな。「今までのヤツ」って何？　そももってご息女の名前は？　ちゃんと紹介しろよ、クレイ。氣い利かねえなあ。

声には出さずブツブツ文句を言いながらついて行くと、礼拝堂の突き当たりに来た。そこには扉があつて、向こうは庭だった。このど真ん中を突っ切るアーケードを歩くこと数分。

奥に屋敷があつた。隠れ家的というか？　めっちゃめっちゃ外部からの侵入を警戒した造りだ。俺なんか入れちゃっていいのかなあ。もう入っちゃったけど。土足なのが申し訳ないほどツルツル廊下。高そうな絵画とか壺とかもある。落ち着かない。割ったり傷つけたりしない自信がない。もしそんなことになって後からいろいろ言われても、責任能力ねえぞ。わかってんのかコラ。クレイ！　面倒なことになる前に、お嬢さんの紹介だけはしておいてくれ。

心密かに懇願していると、ご息女が立ち止まって少しふり返った。「こちらがお部屋です。父が戻るまでここでお過ごしください」

ドアを開け、中を手差しする。俺はクレイと一緒に足を踏み入れ、部屋を見回した。結構な広さの部屋だった。窓も大きく、開閉可能そうである。このまえ閉じ込められた部屋はなんだったんだろう。軟禁用？

「ではクレイ、あとはお願いね」

「ご息女はクレイに声をかけ、その場を立ち去った。クレイはご息女が完全にいなくなったことを確認するとドアを閉め、ソファに腰かけた。

「やれやれ。さすがに疲れたな。おまえも休めよ」

誰に用意された部屋なんだか。だが確かに疲れた。素直に従おう。俺はクレイの向かい席にあたるソファに腰を下ろした。それからおもむろに質問した。

「あの、さっき言ってた？ 今までのヤツ？ って、なんなんですか？」
クレイは苦笑した。

「ああ、それはよ……エレメンタルブレイカーといやあ精霊界の頂点に立つ男だ。超有名人だ。だから、なりすます輩もいるって話で」

「なるほど。それでニセモノですか」

「氣い悪くしたか？」

「別に。ここだけの話、本当にニセモノですから」

「おいおい」

クレイは焦った様子で身を乗り出した。

「こっちは本物だと確信してんだ。そうでなきゃティターニヤとむりやり対面させたりしねえ。しらばつくれんのは勘弁してくれ」

「ティターニヤっていうんですか、彼女」

「……」

クレイは困った顔をしたが、俺は意に介さず腕組みをして足を組んだ。

「前にも言いましたが、エンブレムとか本当に知らないし、俺には身に覚えのないことなんです。カルテットが勝手に大騒ぎしている

だけで」

「カルテット？　なんだそりゃ」

「王子と三銃士」

「……ああ」

クレイはしばらく黙ってチラツと俺の目をのぞき見た。それに反応して俺もチロツとクレイの目を見たら、クレイはスツと背筋を伸ばして咳払いした。

「とにかく勇者を避け続けることはできない。そりゃ分かってんだろ？」

確かに、身分を証明するまではストーキングされ続けるだろう。

冷静な忠告ありがとう。

俺はお礼の気持ちも込めて、ゆっくりうなずいた。そうではなくてもクレイには二度も命を助けられている。せめてこれ以上迷惑かけないよう、勘違いされているならそれなりに、慎重な立ち振る舞いをしようと思う。エレメンタルブレイカーじゃないと判明したあとに、俺に関わった人たちが傷つかないように。不利益を被らないように。

幕間 保安官の休日／クレイ・ソウル視点 その巻

休日だっというのに、ついてない。今日は派出所でシャーリーと待ち合わせ、街で食事する予定だったが、ふいになった。妙な格好したヒューマンのガキを拾ったからだ。

遠目に見たときやフェアリーだと思っていたらヒューマンだった。あんまりヒューマンで黒髪はねえ。ゆいいつヒューマンで黒髪黒目とくりやあ、まず王族系だが……どうも違うようだ。王族にしてはナリが貧乏くさい。それに髪は闇を切り取ったような黒さじゃあないし、目も水晶のような怪しさが無い。陽に透かせば茶色く見えるのは、それが真の黒さを持たない証拠だ。まぎらわしいヤツだ。

なにより奇妙なのは、フェアリーの俺を恐れていない点だ。魔力を持ったフェアリーと一対一で向き合えば、ヒューマンは脅えて口も利けないはずだが、コイツはどうだ。最初はひとつ言もらなかつたが、そりゃ喉が渴いていたせいだった。多少の警戒もあつただろう。

だが水をやったとたん人なつっこい犬のような目えして、ついて来る気満々になった。変わったヤツだ。ヒューマンは強欲でフェアリーを欺くことしか考えてないクズがほとんどだが、コイツは違う。えらく純粋な目をしている。フェアリーの寝首をかくような腹黒さは見えねえ。

だからって油断は禁物だ。案外こんなヤツほど信用ならねえもんだ。どういうわけだか裸足なんでドルーバに乗せてやったが、俺が手綱を離したら最後。そのままかつさらって行っちゃうってこともある。ドルーバは高く売れるからな。そうだ、いっちょ名前でも聞いてやるか。

「俺はクレイだ。おまえは？」

気さくに問いかけてやったが、ヤツはドルーバの背でうつむいちまった。おおっと、名前も打ち明けられねえなんざあ口クなもんじ

やねえな。犯罪者か？　ちつとカマかけてやるか。

「ほら、あそこ。あそこなら水がたんまりあるぜ？」

俺が指差したのはシャーリーが待っている派出所だ。白い屋根とベージュ色の壁の小屋。そいつを見れば誰でも保安官がいることを想像する。もしコイツが犯罪者なら動揺するはずだ。

俺がニヤニヤ笑いながらヤツを見ると、ヤツは期待した目で小屋を見やった。

……おいおいおい。なんてえ嬉しそうな顔しやがるんだ。犯罪者じゃねえのかよ。それとも、しのごの言ってられねえほど喉が渴いてんのか？　わからねえ。まったく妙なの拾っちまったな、こりゃあ。

小屋についてシャーリーをひと通りガン見したヤツは、コップ一杯の水を飲み干して、パンとスープまで胃袋におさめた。やっぱりヒューマンってのは図々しくできてんのかねえ。

そう思っただけで眺めていれば、急に自己紹介しやがった。

「あ、申し遅れました。俺、カワナミっていいいます」

お、遅え！　なんだその時間差攻撃！　しかしまあ、これで犯罪者の線は薄れたな。ただの変人だったか？　とつとと長老んとこ連れてって、ヒューマン領土に強制送還しちまおう。

と、思ったのは良かったが……コイツの服装、どうにかしねえとマズイな。なんでこんな妙ちきりんな格好してやがるんだ？　くそっ、余計な出費だぜ。経費で落としてやる。

俺は強引にカワナミを店へ連れ込み、一番安価な服をチョイスして渡した。長老に会わせるからって、そう畏まらなくてもいいが、無難な格好はしていてもらわねえと困る。フェアリーの威信にもかかわることだしな。

そうこうして試着室の外で待っていると、カワナミが出てきた。照れくさそうにやっているが??まあ、なんつーか、似合ってる。安い服を渡したはずだが、いい服に見える。そんなに男前でもねえのに、サマになってやがるぜ。やっぱり王族の出なんじゃねえのかオイ。もしそうなら金は返してもらうぜ。

「長老に会ったからな、粗相するなよ?」

俺は腹立ちまぎれに、きつく言った。カワナミはしょんぼりしちまったが、気にすることはない。こうまでしてやってる俺に素性を明かさねえのが悪いんだ。所詮ヒューマンってのは恩知らずの礼儀知らず。性根がくさってやがるんだ。

礼拝堂に着いて、俺はカワナミをエントランスの階段に残し、長老のもとへ行った。階段にや、たぷり妖精の粉が吹いている。フェアリーでもあそこで待つのはしんどい。ヒューマンなら尚更だが、悪く思うなよ。俺は保安官だ。卑しいヒューマンからフェアリーの財産を守る義務がある。ヤツがフェアリーに害をなす者なら、妖精の粉でもふって氣力を減退させておく必要があるんだ。

「クレイ。どうした。今日は非番だろう」

礼拝室へ行くと、長老がふり返って言った。今日も熱心に祈りを捧げていたようだ。紺色の髪と青い瞳。文武両道で、若くして長老の地位を得た憧れの人だ。俺の義父でもある。シャーリーを嫁さんにもらったからだ。彼女は長老のご息女だ。いろいろあつて俺と同じ保安官なんてえ道を選んだが、まあとにかく、いい女だ。スタイルは抜群だし、格好はエロいし、腕っ節も強い。俺の力ミさんにもってこいってわけだ。

そいつはさておき。ここへ来た理由を手早く説明しちまわねえとな。

「ヒューマンを拾っちゃった」

義父は眉間を寄せた。

「どこで」

「この先の荒野で」

「なんという者だ」

「カワナミ」

「なぜ荒野に」

「知るかよ。聞いたけど言わねえ。訳ありだな、ヤツあ」

「どこに待たせてある」

「階段」

義父は軽く首を横にふって、ため息ついた。

「スパイなら、いまごろ気分が悪くなつて倒れているか、妖精の粉を恐れて階段から離れているだろう。見て来い」

俺は言われたように、さっそくカワナミを見に行った。エントランスを出た瞬間、正直、心臓が止まるかと思った。

カワナミは階段に腰かけ、野次馬どもに手を振っていた。どういうつもりでそんなことをしたのか分からないが、フェアリーに親しげな態度をとるのは、おおよそヒューマンらしくない。殊に、堂々と階段へ腰を下ろしていることが驚愕だった。

コイツは死ぬつもりなのか。いや、もしかしたら妖精の粉に気づいてないのかも知れない。いやいや、そんなバカなことがあるか。

一分以上座っていれば、確実に具合が悪くなつて粉に気づくはずだ。

「お、バカ、そんなところに座ったら、ケツ真っ白になるぞ？」

どう声をかけたものか迷ったあげく、俺は言った。案の定、カワナミは飛び上がるように立ち上がった。だが振り向いてケツを確認したヤツは、笑って答えやがった。

「大丈夫。汚れてません」

血の気が引いた。こいつあただ者じゃねえ。妖精の粉もつけず、影響も受けないなんて、冗談じゃねえ。そんな芸当をやつてのけるのは、この世にただ一人。フェアリーを愛し、フェアリーのために生きてくれる唯一のヒューマン……エレメンタルブレイカーだけだ。俺はとっさにカワナミの腕をつかみ、宿直用の部屋に閉じ込めた。

逃がしたくなかった。義理の妹ティターニヤのために。

義父はカワナミの素性を探った。魔力を駆使し、カワナミがここに至った経緯を水晶に映し出した。

?? トール・ジェイドの姿が映った。背後には小さく、三銃士らしき人物も映っている。カワナミと何か言い争っている様子だが、声までは聞こえない。やがてカワナミは四人と別れたあと、ヒューマン領土を出て、あの荒野へと抜けた。

「カワナミというのは偽名なのではないか？」

長老の疑問に、俺は眉をひそめた。

「なんだって偽名を使うんだ」

「これまで何人もの二セモノが現れた。彼が本物なら、それらを警戒して名を伏せることもするだろう」

俺は息をのんだ。確かにそう考えりや辻褄が合う。自己紹介をためらったのも、エレメンタルブレイカーだと公言するのを避けたかったと思やあ……命でも狙われてんのか？ いや、そりゃねえな。エレメンタルブレイカーの命なんか狙ったら、狙ったほうがお陀仏だ。狙うとしたら命じゃねえ。イチの値の四大元素か。

「確認してくる」

俺は再びカワナミの元へ飛んだ。勢いあまって錠を下ろしてしまっただが、そこは謝りや許してくれんだろう。

だが部屋に入るとカワナミは寝ていた。爆睡してやがる。長老のもとへ来て安心しちまったのか？ そういや荒野に抜けるまで一睡もしてなかったな。そんなに緊張していたのか？

カワナミの寝顔を眺めていると、背中が熱くなった。エレメンタルブレイカーを想うときの、フェアリーの素直な反応だ。エレメンタルブレイカーはイチの値の四大元素とフェアリーの羽根とを合成

し、化学反応を起こさせてフェアリーを大きくしたと云われている。背中が熱くなるのはその名残なんだと、ガキの頃さんざん聞かされた。

すべてはフェアリーの地位を確立するため。すべてはヒューマンの悪を根絶するため。

だが実のところ俺は、周りほどヤツを信じちゃいねえ。フェアリーの地位はまだ完全に確立されちゃいねえし、ヒューマンの悪も根絶されてねえ。ヤツがスゲエっていうなら、そりゃ成し遂げて言えっつてえ話だ。それでもまあ革命は起こしてくれた。そこは感謝している。あとは俺らの努力かも知れねえ。だから俺がヤツに求めるのはただ、「ヒューマンを抑圧し続けてくれること」「ティーターニヤを救ってくれること」、この二つだ。

そろそろカワナミを起こそうと部屋へ行くと、カワナミは起きていて、食事をすませたあとだった。

「カワナミ、おまえ、本当の名は？」

カワナミは表情をこわばらせた。やっぱり嘘をついていたのか。エレメンタルブレイカーだと悟られなかったために？　だが長老のもとで隠し通す意味はない。だとしたらこの沈黙は俺への罪悪感か？

見据えていると、カワナミは深呼吸してやっと白状した。

「カ、カワナミ、トイチだ、けど」

ああ、まるつきり嘘じゃねえのか。さすがに誠実だ。それにしても???

「トイチ、か」

ため息が出る。それが本当なら、俺は一生分の運を使い果たしちまったことになるが……

「あ、あの、たまたま、そういう名前だけで、エンブレムと俺は無関係です」

んあ？　なんだと？　なに言つてやがる。

「誰がエンブレムと関係あるのかって聞いたよ？」

「で、ででで、でもっ、本当に偶然、そういう名前なわけで」

「バカにしてんのか、おい」

正直に名乗ったかと思やあ、必死に身分を隠そうとする。意味わからねえ。そんなに警戒しなくても俺は保安官だ。もっと信用してくれてもいいんじゃないか？　……無理か。荒くれ者にしか見えねえよな。こんな時にやあ、自分の生き方を後悔するぜ。

結局トイチは俺の制止を振り切つて異世界に行つちまった。これからテイターニヤを説得して顔合わせさせようって時にだ。そういう俺の思惑を義父も察したんだろう。こつちを見てため息ついていゝる。まあ、勇者をほつたらかしておくわけにもいかねえしなあ？　フェアリーだけのエレメンタルブレイカーであつて欲しいってのは、さすがにワガママか。

幕間 保安官の休日／クレイ・ソウル視点 その式

トイチが異世界へ行っちまってから、四ヶ月は平和に過ぎた。時々、もうヤツは戻ってこねえんじやねえかと不安になった。一緒にいたのは、ほんの数時間だ。エレメンタルブレイカーだと判断するには、ちょっとアレだ。だが勇者に目えつけられてて妖精の粉がつかねえってのがな……ほかには考えられねえ。ヤツに違えはねえんだ。

しかしティターニヤは首を縦に振らない。過去に特殊繊維でできた服を着て妖精の粉がつかないところを披露した二セモノがいたからだ。そんなときや俺が疑って顔にぬりつけてやったんだがよ。でもトイチは、俺が買ってやったそこらへんの服とマントをつけてたんだ。疑う余地はねえ。

ああくそつ。皮膚につかないことも確かめておくんだつたな。

そんなことを思っていた矢先。街の子供が、妖精の粉を触りまくってたトイチが指にまったく粉をつけてなかったって情報を持ってきたくれた。やった！ もう間違いねえ！

俺はティターニヤのもとに、すっ飛んで行った。

「今度こそ本物だ。間違いねえ」

ティターニヤは困惑していた。

「やめて、クレイ。過剰に期待して、また違ったらどうするの？

私、これ以上はダメ。耐えられないの。怖いよ」

「だけどよ、今度のは本当に……」

「ダメだったら！ そうだとしても疑っていて、お願い。信じてしまつて、最後の最後で間違いだったら？ 私、もうなにも信じられなくなるわ」

重症だ。俺の手には負えねえ。早く野郎が戻ってきて、イチの値の四大元素でも精製してくれりゃあ万事解決なんだが。ああ、なに

してやがんだトイチ。おまえがさつさと英雄を決めてココにいてくれなけりや、テイターニヤは??

俺の願いが届いたのかどうかは分からねえ。それから間もなくしてトイチが戻ってきた。といっても、そうとう辺境にある村へだ。「ヒューマンを保護したから身柄を送検したい」と言われた時にや「非番だから断る」と答えるつもりだったが、書面に?カワナミ?って文字を見た時にやあ飛びついた。

とはいえ、身柄を預かりにドルーバを飛ばした道中。心配だった。「なぜヤツは?トイチ?と名乗らない」

俺には理解できなかった。

「まだ警戒してんのか?　だが辺境の村で隠すのは危険だぜ。命がいくつあっても足りねえ。互いにな。フェアリーを想うなら名を明かせ、トイチ。俺たちに罪を犯させるな。俺たちを傷つけるな。それともオマエは、それを望んでんのか」
いつのまにか、そう叫んでいた。

ようやく駆けつけた時にや不安が的中してやがって、肝を冷やした。だがヤツは結構のんきに笑って「水が飲みたい」だよ。余裕だぜ。フェアリーの兄妹とも仲良くやっていたみたいだ。さすがだと言わざるを得ない。しかも、

「発つ前にティムとローザにお礼をしたいんですけど、どうしたらいいですか?」

なんて言いやる。しおらしいじゃねえか。柄にもなく胸が熱くなったぜ。ヒューマン全員がオマエみたいだったら、こんな憎しみも抱かなくてすんだのによ。うまくいかねえもんだな。

「あいつらには俺からやつとくよ」

とは言ったものの、いざ謝礼金を渡すってえ時だ。ティムとローザが思いつきり首を横に振って拒みやがった。

「謝礼なんてとんでもない！ いただけません！」

「けどよ、ヤツが世話になったから何か礼がしたいって言うしょ」

「ええっ！？ だってオレ、エレメンタルブレイカーだなんて思わないから、いきなり後ろから頭殴ったし」

「ぶっ！ な、殴ったあ？」

「そ、そのうえコキ使ったし、食事だって、その、畑のもの……を、食べさせたし」

俺は目を見開いてティムとローザを凝視し、啞然とした。

「は、畑のもんって、パンプキンじゃねえか。あんなもの食わせたのか？」

「だ、だってオレたち、二人食ってくのがやっとだし、そのこと話したら、全然それで構わないって言うてくれて……つい。言葉に甘えちゃって申し訳ありませんでした」

ティムとローザはそろって深く頭を下げた。俺は開いた口が塞がらなかった。

信じられねえ。こりや想像以上に??

俺はドルーバの前で待つトイチのもとに急いだ。

「謝礼はいらねえんだとよ」

わざと理由を告げずに言ってるやると、トイチは困惑した。

「えー？ 弱ったなあ……やっぱクレイからっていうのが良くなかったのかなあ。うん、きっとそうだ。すみません。いくら手持ちがないからって、それはどう考えても誠意がありませんでした。断られて当然です。そのうちどうにかして自分でします」

自己完結しやがった。かなりズレたところでだ。俺は頭が痛くなつて、こめかみを押さえた。

「おまえ、そりや本気か？」

「は？」

「アイツらには頭殴られたり、家畜のエサ食わされたりしたんだろ」
「ワハハ、それはしょうがないですよ」

「な、なにがしょうがねえんだ？」

「ヒューマンを見たら殴りたくなるっていう気持ちは理解できるし、突然やって来てタダ飯は食べません」

「???！」

笑顔でサラツと言いやがって。身分を明かしやあ、いくらでも上等な扱い受けたはずだ。それをしなかったのはティムとローザのためだ。そうだろ？ 素直にそう言いやがれ。子供二人に負担はかけられねえ。まして殴られてる。そんなことが周囲に知れたらティムはブタ箱行きだ。

ヤツはティムが罪を逃れられる機会をうかがってたんだ。身分を隠してりや近郊の大人たちがやってくる。ヒューマンの命を狙いにそこへ俺が登場すりや、どうだ。未遂ってことで村人は厳重注意ですむうえに、ティムのこともうやむやになる。大人たちがこぞって犯しそうになった間違いを、子供がやつても責められねえ。ティムの正当性が証明されるってわけだ。

ヤツはフェアリーを想えばこそ名を明かさなかった。罪を犯させず、傷つけなかった。完敗だぜ。器デカすぎんだろ。

「それじゃあ、行くか」

俺は動揺を見せまいと、背を向けて自分のドルーバに股がった。トイチもならってドルーバに股がり出発した。中継の宿屋に着くまで、俺はふり返ることができなかった。トイチの顔をまともに見られなかった。

伝説なんてのは美化されてるもんだと思っていた。フェアリーを愛しているヒューマンなんているわけねえ。ヤツはヤツなりの野望があつてフェアリーを救ったんだと、どこかで疑っていた。エンブレムによる束縛がある以上、全面的にエレメンタルブレイカーを信用するわけにはいかねえ。それが俺の信念だった。

だが覆されそうだ。今トイチの顔を見たら、完全に覆される。エ

レメンタルブレイカーは伝説以上にスゲー野郎だってよ……

俺はトイチを迎えに行く前に、義父とティターニヤを説得していた。こっちの事情を話すのはまだ早いが、顔合わせくらいはしておいたほうがいいと思ったからだ。だがティターニヤは心を閉ざしちまってるし、義父はそんなティターニヤを心配して反対している。会っておく価値は絶対にあるんだが。

俺は仕方なくシャーリーに相談した。彼女のほうは乗り気だった。さすが俺のカミさんだ。俺はシャーリーを連れてティターニヤの部屋を訪ねた。礼拝堂裏にひっそりとたたずむ屋敷の一室。薔薇の温室に続いている部屋で散歩もできるが、だからって毎日そんなところに閉じこもっているのは感心しねえ。これは表に引っ張り出すいい機会だ。

「会ってみなさいよ、例のトイチってやつに」

両手を腰にあてながら、シャーリーは言った。イスに座っているティターニヤは怪訝そうにシャーリーを見た。

「お姉様ったら、またそんな下着みたいな服を着て」

「水着よ。私の管轄区域は暑い。これならいつでもシャワーを浴びれるし、川でも泉でも泳げるでしょ？」

「だからって……上になにか羽織ったら？」

「マントがあるわ」

「そんなの背中しか隠れないじゃない。意味ないわ」

「ウルサイわね。私の勝手じゃない。それより会うの？ 会わないの？」

「会わない」

「強情ね」

シャーリーは肩をすくめ、俺に向いた。

「ターニヤは無理。お父様を説得しましょ」

「おいおい、ちったあネバれよ」

「あのね、この子は一度イヤと言ったら最後まで譲らないのよ」

シャーリーは言って、さっさと温室を出た。俺はその背を見送ってティーターニヤに言った。

「なあ、ヤツは礼拝堂の階段に堂々と腰かけて、なんともなかったんだぜ？　しかも妖精の粉を触って遊んでやがったんだ。その指にも粉はついてなかったってんだから間違いないって」

「クレイ、それは直接あなたが確かめたことなの？」

「え？　あ、いや。俺は階段に座ってたヤツのことしか見てねえけどよ」

「じゃあダメよ」

「街の連中が嘘ついてるっていうのか？」

「そうは言ってないわ。でもダメ。妖精の粉くらいじゃ証明できないわ。ただ単に欲のないヒューマンだったのかも知れないじゃない」

「欲のないヤツなんかいねえ。それがフェアリーでもよ。俺だってシャーリーだって……長老だって妖精の粉には酔う。ヒューマンにそんな特殊なヤツがいるなら、そりやどう考えたってエレメンタルブレイカーじゃねえか」

俺が言い切るとティーターニヤはうつむき、膝の上で指をいじった。「彼がイチの値の四大元素を私の目の前で精製するまでは、信じない」

分かんず屋のティーターニヤは放って、俺はシャーリーを追いかけた。ちょうど義父の部屋から出てきたシャーリーは、俺を見てニツと笑った。勝利の女神の微笑みだ。

「あなたが連れ帰ってくる頃に、お父様が不在でいればいいんだわ。そうすれば否が応でもあの子が出迎えなきゃならない。お父様は承知したわ」

我ながらホントいい嫁さんもらったと思う。このカワナミ・トイチってやつも絶対にエレメンタルブレイカーだ。こりゃティターニヤと対面させる日が楽しみだ。

なんて思っていたが……ティターニヤの態度が異常に良くねえ。むりやり矢面に立たせたのは悪かったけどよ、そりゃねえだろ。テンション上げてたトイチも萎縮しちゃったじゃねえか。本気でエレメンタルブレイカーに助けてもらおうって気があんのかオイ。

トイチはトイチで偽エレメンタルブレイカー宣言しやがるし、なんなんだデメエらは。

俺はなんだか恨めしくなっただけでチラツとトイチの顔を見た。するとトイチが軽く視線を返した。その目にゾツとした。紅く光る瞳に秘宝石の力を感じたからだ。コイツは確かに持っている。エンブレムに埋め込んだあの秘宝石を、体内に封じていやがるんだ。

それでもエレメンタルブレイカーじゃねえって言い張る理由はなんだ？ 勇者に会いたくないってえってことと関係してんのか？ 英雄を選べないのか？

いや、エンブレムを渡す気がねえんだ。それはつまり……ヤツはひよつとしたら??

俺は背筋を伸ばして咳払いした。

「とにかく勇者を避け続けることはできない。そりゃ分かってんだろ？」

トイチは憂いを帯びた表情でゆっくりうなずいた。

カルテット・リターンズ

ティターニヤが告げたように、長老は勇者ことカルテットをともない翌々日に戻ってきた。その間の二日。俺は何をやっていたのかというと、一日の大半を中庭でボーツと過ごしていた。

部屋にいても落ち着かないし、街へ出ればフェアリーに囲まれる。クレイは保安官としての任務があるので夜遅くまで帰らないし、ティターニヤは部屋から出る気配もない。誰かと接触があるとしたら、俺の食事を配給してくれる家政婦のおばさんだけだ。中庭で過ごす以外、俺にできることはない。

さいわい中庭は広い。適当に東屋もある。木々が生い茂っているから涼しいし、木漏れ日は美しい。無心になってリラックスするのもいいだろう。いろいろありすぎて疲れている。身も心も。

俺は芝生を見つけて寝転がった。最近よく眠れる。元々いつでもどこでも寝られるタチだが、特に昨日今日は昼夜のべつまくなし寝ている気がする。カボチャ畑での慣れない作業とドルーバに股がったの旅が応えているんだろうか。

暇だと時間は経たないものだが、睡眠時間が多いせいか二日経つのは早く感じられた。そして俺は、長老を出迎えるため早起きしてエントランスの階段にいる。必然的にカルテットも出迎えることになるが、多少の難は目をつぶろう。長老にはいろいろ相談に乗ってもらいたいので印象を良くしておきたいのだ。

それにしても眠い。立っているのがダルイ。前回のことがあるので迷ったが階段に座った。

ふわあー。早く帰ってこねーかなあー、長老だけー。

「トイチ！」

という聞き慣れた声が突然降ってきた。「んあ？」と顔を上げる

と桜井がいた。でもって礼拝堂前は人ばかりである。俺は驚いて身を引いた。

「うおっ、やべっ。寝てた!」

街の住人のいい見せ物になっていたことは間違いない。座ったまま熟睡するのは危険だ。

「礼拝堂の階段でおねえねとは余裕だな」

「うるせーな。最近やたら眠いんだよ」

俺は階段に手をついて立ち上がった。すると桜井が透かさず俺の腕をつかみ、手の平を見た。

「驚いた。本当につかないんだな、粉」

俺は苦笑した。

「つくぼうがオカシインじゃね?」

桜井の手を振り払いながら、なんか腹立ってウツカリ精霊界の常識全否定してしまった俺だけど、ふと長老の顔が見えて申し訳なくなった。しかし長老は気を害したふうもなく微笑んだ。

「崇高な心というものは、そう簡単に得られるものではありません。しかし、ごもつとも。妖精の粉を身につけないことが常識となることこそ理想です」

うっ、やっぱ違うな。本当に偉い人は態度も発言も立派だ。

聞くところによると、妖精の粉は身体や衣服につくというより人の欲や傲慢さや悪意に付着するものらしい。長老の言葉はそういうことから出たわけだが……釈然としない。俺だって欲まみれだ。卑屈で低俗さに磨きがかかってるし、少しは悪意があるだろう。現にカルテットへの嫌悪がある。俺と関わった人に不利益が生じることが避けたいと願ったばかりだが、カルテットだけは大いに不利益こうむれと思う。それは悪意じゃないのか?

俺が眉をしかめていると、金髪碧眼の佐藤海地が一步踏み出てきた。

「ご無事でなりよりです。トイチ様」

それにならうように銀髪紫眼の真部李幸と茶髪緑眼の坂本里奈も

前へ出た。

「急に姿を消してしまわれて、心配しました」

「おまえらに心配されるいわれはない」

俺はいつものように反応したつもりだが??失敗したかもしれない。

素っ気ない台詞にカルテットが硬直することは予想していたが、長老やその他もろもろのフェアリーたちまで固まったからだ。いつかどっかで見たような深閑とした光景。

お、おーい。どーした? そんな奇異なこと言ったかなあ?

いやーな汗をかきはじめていると、長老が厳かに寄ってきた。

「恐れながらトイチ様、彼らは勇者です。英雄としてのオーラも充分ですし、立場的にトイチ様を案じられるのは当然のこと。なにゆえそのような」

勇者、英雄、それが一番わからないんだよなー。なんでコイツらが? とりあえず謝っとくか。長老コエーし。

「すみません。この世界がどういう基準で勇者を選んでるのか、はなはだ疑問ではありますが、奇異に思われたのなら謝ります」

間にチクツと嫌味を言ったことは見逃してくれ。言わずにいられないんだ。コイツらが勇者だなんてちゃんちゃらおかしくて、はらわた煮えくり返るんだよ。

しかし嫌味は見逃されなかった。カルテットは顔を真っ赤にしなから屈辱に震え、長老は厳しい顔をした。

「慎重に??フェアリーでも名のある者が厳重に選び出しました。

それは五百年以上も前のことですが、彼らは確かな基準のもとに選ばれ現世に転生したのです。どこがお気に召しませんか?」

うわっ、マズイ! そーなの? ひょっとしてフェアリー敵に回しちゃった?

長老に真っ正面から見据えられ、俺はヒツと息をのんだ。背は俺より高いんだが階段二段下にいるため見上げる形になっている。その上目遣いが怖さに拍車をかけていた。

こ、こえー！ 心臓がドキドキしてきた。胃もム力つくし、頭もクラクラする。あれ？ もしかしてこれが妖精の粉の影響なんじゃないの？

俺は軽く額を押さえ、まぶたを閉じて再び開いた。すると、とたんに頭の中がスッキリした。気分も悪くない。

お？ なんだったんだ今の。

不思議に思いながら、あたりを見た。みんなシンとしている。つか……長老が片膝ついてる！ え？ どうした？ さっきまでピリピリしてたのに、いつのまに溜飲下げたんだ？ ていうか俺？？なにしてんだっけ？ あ、そうそう。長老のお迎えに出てきたんだっただ。居眠りしたけど。

俺が頭をポリポリかいてると、真部が声を上げた。

「どうすれば！ 我々はどうすれば認められるのですか！」

はいー？ なに急に訴えてんだコラ。嫌味がそんなに利いたか？ まあいいや。なんかテキトーに答えてやろう。

「うーん、とりあえず人の役に立つことしてみれば？」

カルテットはポカーンとした。うん、正しい反応だ。こんなこと小学生でも提案できるよな。ウハハ。

俺は軽いノリで階段を下り、まだ片膝ついてる長老の前にしゃがんだ。

「どうかしましたか？ 具合でも悪いんですか？ 早くお休みになられたほうが……」

「は？」

長老まで茫然としながら俺を見つめた。威厳に満ちた長老のそんな顔は珍しいんじゃないだろうか。ヒューマンの王宮がどこにあるのか知らないが、よっぽど疲れているのかも知れない。

その後どこかギクシャクした雰囲気の中、俺と長老とカルテット

は礼拝堂に引込み、街の住人は解散した。長老は自室に、カルテットは客室に、俺は中庭にいる。さんざん寝たと思うんだが、まだ眠い。今日もまた芝生に寝転がって晴れ渡った空の下、目を閉じた。

「いつまで寝てる！」

俺の腕を軽く蹴って起こしたのはクレイだ。目を開けると夜の帳を下ろしている空が一周回転してクレイの顔が見えた。さすがしく笑っている。

「飯だぜ？ 勇者どもも来てっから豪華な食事だ。食いに行こう」

クレイの言うことは、いまいち耳に入らなかった。食事はこれまで部屋に運ばれたものを一人で食っていたからだ。クレイの口ぶりだと、みんなで食卓囲むってイメージが浮かぶ。ピンとこなかった。

「食いに行くって、どこに？」

「食堂だ。久しぶりだぜえ。みんながそろって食卓囲むのは」

「みんなってことはティーターニヤも？」

「おう」

俺は跳ね起きた。顔を見たいと思っていた。

食堂へ行くと、長老もティーターニヤもカルテットも席に着いていた。なぜかシャーリーもいて、そのとなりにクレイが座った。

やっぱり二人は夫婦なのかな？ クレイは礼拝堂の軟禁室あらため宿直室に寝泊まりしているようだから招かれるのは分かる。それにくっついてシャーリーがいるのは奥さんだからとしか考えられない。お似合いすぎる夫婦だなあ。

なんて思いながらボーツと突っ立っていると、真部が立ち上がって空いている上座のイスを引いた。

「こちらへどうぞ」

「え？ そこ？」

首をかしげると長老が咳払いした。

「あなた様のお席です」

ああ、そうですか。

俺はうなだれそうになるのを堪えて上座の席に座った。そして家政婦さんがグラスにシャンパンのようなものを注ぎ終わると、シャーリーが言った。衝撃的な台詞だった。

「じゃあお父様、乾杯の音頭を」

で、長老が立ち上がり音頭をとった。

待て待て待て待てー！ シャーリーのお父様が長老ってことは、シャーリーのお父様が長老ってことは、シャーリーのお父様が長老ってことはーっ！

毛細血管切れそうだ。えー？ シャーリーってもしかしてティタニアの姉さん？ あるいはクレイが兄さんで義理の姉？ どっち？ いやどっちにしても面妖だ。これ以上考えると目がグルグル回りそうだから、あとでクレイに確認しよう。俺はまず桜井に聞いたことがある。

「なあ桜井。 沢垣先輩に会ったか？」

桜井は目を向けてニツと笑った。

「ああ。カラオケすつぽかしたのは適当に言い訳しといたぜ」

「お、サンキュー」

「で、おまえはどういう理由で市役所前の道路を横断してたんだ？」
ゲフツ。そーれーはー聞ーくーな！

俺はギロツと桜井を睨んだ。だが桜井は対抗するように笑みをキープしている。くっそー、忌々しい。

「どこにしよう俺の勝手だ」

「おまえが消えたあと、俺たちは不自然さのない理由をひっさげて周囲に取り繕うため奔走した。そんなふうに言われるなんて理不尽だな」

「おまえたちが俺に対してそれ以上に理不尽だったことを忘れるんじゃない」

桜井沈黙。よっしゃ勝った。ざまあみろ。

俺はようやくフォークとナイフを手に取り、食事しにかかった。すると長老を始めとし、みんながそれぞれ食事を開始した。

お、おおお？　もしかして俺が手えつけるの待ってた？　すまーん。そんな作法があるなら教えといってくれよー。ああもう二度と上座に座りたくない。

で、なんとか無事に終わった食事会だが……ティターニヤはひと言もしゃべらず、チラツとも俺を見なかった。しくしく。しかもクレイによると、今日から夕食はこのような会食が続くらしいとのこと。地獄。

かたくなに無視するティターニヤの横顔が目には焼きついている。彼女は二セモノを警戒しているらしいが真偽はさておき、せめて普通の客人として見て欲しい。

いや、エレメンタルブレイカーという肩書きがなければ客人にすらなれないか。彼女にも逢わず、この世界へも来ることがない人生を歩んでいたはずだ。どちらが俺の望む人生だったかと問われれば、それは間違いなく地球で平和に暮らしている俺だ。なのに何故だろう。彼女と出逢って三日。ここに暮らして三日。たったの三日で俺は、ちよつと地球への未練が薄れていた。

メドが立たないせいもある。なにしろ自力だからな。いつになるのか見当がつかない。世話になる場所があるっていうのも要因だ。不安がないぶん必死さもなくなる。ティムとローザの家にいたときは毎日帰ることを考えていた。知らない土地で慣れない生活をしたせいだ。だが法の番人である保安官クレイ、フェアリーの長だという確たる地位の者、秩序が保たれている街……こういうものが身の回りにそろつと安堵してしまってダメだ。

そのうち帰ればいいだなんて思っている俺がいる。なんの努力

もせず。

ああ。最近ずっと眠れていた俺なのに。夕食会なんて珍しいことしたもんだから目が冴えていけない。

俺は部屋を出て中庭へ行った。

行くんじゃなかったと後悔した。桜井がいたからだ。

「涼みに出て来たのか？」

と聞かれ、俺は苦々しく笑った。

「眠れない」

「昼寝のしすぎだろ」

「かもな」

俺はいつも寝転がる芝生の上に座った。すると桜井も並んで腰を下ろした。

「おまえは俺たちのこと足りないっていうけど、実際、これ以上どうしていいのかわからない。過去の英雄はそんなにも優秀だったのか？」

桜井の質問に、俺は首をかしげた。

「ん？ 俺そんなこと言ったか？」

「今朝言っただけじゃないか」

「今朝あ？ 言ってるよ。嫌味は言っただけ、そこまで深い意味ねえし」

「はぐらかすな。悪い癖だぞ？」

「はぐらかしてない」

「だったら答えろ。俺たちではダメだ、不十分だと言った根拠を。」

おまえのせいで俺たちは大恥かいたんだからな」

俺はいつとき黙って桜井を見た。わからなかった。桜井の言っていること全部が。確かに普段から奴らを最低だと思っているが、公衆の面前でそこまできつぱり見下せるような度胸はない。

「記憶にございません」

しょうがないので、どっかの政治家みたいに言ってみた。案の定、

桜井はキレた。

「あんまりバカにすると、いくらオマエでも殴るぞ」

「うおー、ヤメロ！ おまえ有段者だろ！」

「わ、悪かった。でもマジで記憶にない。それ本当に俺が言ったのか？」

桜井は眉をしかめ、上げかけた手を引つ込めた。

「覚えてないのか？」

「ない」

そこへガサガサと植木をかき分けながら三銃士が現れた。

「今の話、本当ですか」

「盗み聞きなんて趣味が悪いぞ」

桜井の言葉に、佐藤が身なりを整えながら答えた。

「王子こそ、抜け駆けなんて感心しませんね」

「抜け駆けなくしてトイチの心は掴めない。俺がせつかく東京に出て平等な機会を与えてやったのに、生かせなかったのはどこのどいつだ」

「じゃあ私がこれからトイチ様をデートに誘ったりしても平等な機会とみなしてくれるの？」

里奈が突然とんでもないこと言った。いつも沈黙を保ってるのに珍しいな。でもデートは却下だ。俺がデートしたいのはティーターニヤだから。

里奈は美少女だし勇者という以外、文句のつけどころはない。だが理想すぎてアイドルを見る感覚でしか見られない。憧れは憧れだ。恋とは違う。もっとも、彼女のほうこそ俺を恋愛対象として見るのなんかゴメンだろう。

その点、ティーターニヤはモロ恋愛対象だ。見たとたんにギューツと抱きしめたくなる衝動にかられる。実際そんなことしたら良く張り手、最悪グーパンチだろうけどな。

「女の武器を使うのは卑怯だろ」

佐藤が言つと、里奈はふくれた。

「歴代の英雄はみんな男じゃない。不利よ。ハンデちょうだい」
すると真部が人差し指を立ててニツコリ笑った。

「じゃあ一日交代で独占するというのは？」

「あ、ナイスアイデア！ さすがリコー！」

リコーというのは真部のことだ。李幸ではなくリコー。佐藤は力イジ、里奈はリーナと呼ぶのが本当らしい。俺にはどうでもいいことだが。

しかしコイツら痛いな。事情を知らないヤツが聞いたら変な誤解をされないとも限らない台詞をバンバン吐きやがって。しかも俺の意見は無視かよ。勝手に話を進行するな。

「それにしても、今朝のことを覚えてないというのは問題ですね」
うわっ、急に話が戻った。真部め。記憶力のいいオマエが忘れたんなら問題だが、きつと俺のは問題じゃないぞ。もうその話は流そうぜ。めんどくせー。

しかし四人の視線が俺に集中。すまん。俺は無視しろ。勝手に話を進行してくれ。

俺はサツと視線をそらせた。が、桜井が強引に正面向かせた。

「秘宝石を封じてるんだ。なんか障害があっても不思議じゃないだろ。な、トイチ」

「え？」

「以前にも記憶が欠落したことが？」

「ね、ねえよ」

「今回が初めてか」

「そ、そうかもな」

そのまま睨みつけられること数秒。桜井は不敵に笑い、

「フン、そういうことか」

と言って立ち上がった。

「俺たちは本格的に試されてるってわけだ。いいだろう。明日から真面目に活動開始だ」

三銃士は眉をひそめた。

「活動？」

「人の役に立つことをする。つまりボランティア活動だ」

佐藤のクエスチョンに桜井が回答すると、真部が険しい顔で腕組みした。

「そんなことで認められるんですか？」

「しないよりはマシだ。少なくとも評価は下げない。トイチの言うことに従うんだ。エンブレムをもらいたいんだろ？」

三銃士は真面目な顔でゴクツと唾をのみ込んだ。桜井はふり返り、俺を見据えた。

「おっかないな、おまえは。そうまでしてフェアリーを守りたいと想う気持ちが分らないぜ」

いや、俺はおまえの言ってることが分らない。

「見ている。フェアリーなんかに負けない。必ず俺のことを認めさせてやる」

一方的で意味不明な決意表明を残し、桜井は去った。三銃士はしばらく戸惑った様子で俺の顔を見ていたが、やがて頭を深く下げて立ち去った。

本物のエレメンタルブレイカー

なんだかんだと十日間。長老の屋敷でウダウダ過ごしている俺は、やることもなく中庭をブラブラしていた。眠気に襲われなくなった昨今はマジ暇で死にそうだ。退屈で退屈でしかたないから、囲まれること覚悟で街に出よっかな……なんて、自殺行為か。

「暇だからボランティアに参加する」と桜井に言ったら即却下されたもんな。

「おまえが来たらフェアリーが興奮して仕事にならないだろ」

「エレメンタルブレイカーじゃねえのに」

「まだ言ってるのか。しつこいな。正体バレバレなんだよ、はつきり言って」

「どこが？」

「全部！」

俺の全部がそう見えるんだとしたらエレメンタルブレイカーは凡人代表つてことになるけど、いいのかそれで。

回想に突っ込み入れながら、俺は半私物化している芝生の上に寝転がった。

地球へ帰るための努力でもすればいいんだろうが、それはちよつと隅に置いておきたい問題だったりする。と言うのも、長老が帰宅してから何度か相談を持ちかけたが、全部徒労に終わってしまったからだ。

異世界への移動は原則として杖などの道具を使うと言うが、それも魔力の高いフェアリーが定期的に力を込めなければ使えない代物らしい。こういう常識をすつとばして異世界移動をしたとなると、正直アドバイスしようがないのだから。しかも？？

「お言葉ですが、勇者がそろい、あなた様も戻られた今、異世界へ移動する意味はありません。彼らが最終試練をクリアしたのは事実です。これからの彼らを見守り、いずれ英雄をお定めください」

「いや、だから俺、エレメンタルブレイカーじゃないんです」

「ご冗談を」

「冗談じゃありません」

「とにかく勇者の方々もやる気を出しております。あなた様もそろそろ精霊界へ落ち着かれてはいかがですか」

こんな具合に取りつく島もない。カルテットはもちろんクレイも長老も、誰一人として俺がエレメンタルブレイカーじゃないということを確認してくれないのだ。

六日連続開かれている夕食会も上座を譲ることができず、つらくて苦しい。分不相応な場所にあるということが、こんなにも苦痛だと思わなかった。最初は安全圏で呑気だと思ったんだけどなあ。

最近絶えなため息につき、俺は青い空を睨んだ。

そういやティムとローザにお礼してなかったな。つっても、どうかしてこっちの通貨を稼がないと払いようもない。うーん、どうすっかなあ。

浅はかな俺が考えたのは、近場で顔を隠しつつ働ける仕事を探すことだ。そんな都合のいい仕事があるとは思えないが、何もしないよりはいい。

俺は顔にマフラーくらいの布を巻いて顔を隠し、さっそく街へ出た。礼拝堂正面からはマズイので勝手口を利用した。不審者感満載だが、布をはがれてもエレメンタルブレイカーだと思われるだけだ。問題ない。

できれば体力系の仕事がいいな。文字わかんねえから頭使うのはダメだ。こうしてみると初めて就職活動だっていうのに条件絞り込み過ぎだよな。ぜってー見つかんねー。

見つかった。それも雇用者サイドからのオファー（？）だ。

「おい、おまえ作業員だろ。サボってないで早く来い」
作業員？

俺は首をかしげたが、作業員という響きがいかにも仕事っぽいのでついて行くことにした。着いた場所は解体作業現場。古くなった家屋を取り壊しているようだ。粉塵を避けるため全員が顔に布を巻いている。

ラッキー！　こんなマンガみたいな展開があるなんて奇跡だ。運が向いてきたのかな。

俺は嬉々として近くに転がっていたハンマーを持ち上げ、見よう見まねで解体作業に勤しんだ。

終わったのは夕方。給料は日当。スゲ理想的。しかし通貨の価値が分からない。紙幣を二枚もらったが、これって日本円にしてどれくらいなんだ？

……まあいいや。明日はまた別の場所で作業らしいから、そこへも顔出して給料もらおう。何日か働けば少女少女の小遣いくらいにはなるだろう。

こうしてお忍びまがいの労働をすること五日間。稼いだのは同じ柄の紙幣ジャスト十枚。よしよし、謝礼っぽくなったぞ！

仕事帰り、俺はあらかじめクレイに宛先を記入してもらっていた封筒に給料を入れ、丁寧に封をして郵便窓口に出した。もちろん顔は隠したままの状態だ。どっから見ても解体作業員。この姿であるかぎり街での行動は自由だ。解体業ハンザイ！

疲労感と達成感とに満たされながら帰途についた俺は、明日から何をすればいいかと思案し、ちよっと楽しい気分浸っていた。意

気揚々と歩く。その歩調が乱れて止まったのは、礼拝堂が見え始めた頃だ。エントランス前がまたもや人だかりである。何があったのか少々心配だ。いまさら俺が行方不明とかで騒ぎにでもなったのだろうか。だとしたら帰りづらいな。

そう思いながら恐る恐る近づく、騒ぎの中心に見知らぬ人物がいた。灰色の髪にアッシュブラウンの目をした背の高い男で、まあまあ二枚目か。

俺は騒ぎの原因が自分じゃないことにホッとしながら、こっそり輪に加わってみた。そこで階段の最上段に立っている男を改めて見上げた。男は二人の貧相な従者を連れている。背が低く痩せていて、年は四〇五十。二十代半ばと思われる精悍な男には不釣り合いな従者だ。なんなんだろうか。

ボーと見上げていると、礼拝堂から長老やカルテットが慌ただしく出てきた。

「そちらが差し出した小ビンの中身はイチの値の四大元素であることに間違いはありません」

長老の発言に俺は目を丸めた。

「イチの値の四大元素……!? うわー、どんなんだろ。見てみて」。

ソワソワする俺に気づくこともなく、階段の上の男はフンと鼻先で笑った。

「だから、さきほどから言っているだろう。俺こそがエレメンタルブレイカーだと。はやく中へ入れろ」

「エ、エレメンタルブレイカー!? なに? ついに現れちゃった? 本物のエレメンタルブレイカーが?」

急なことで俺は驚き興奮した。だがそれは周りの住人も同じなので目立つことはない。

長老とカルテットも作業員になりすましている俺に気づかず、額に汗を浮き上がらせながら暗い面持ちで男を見据えた。

「これだけでは証明に不十分です」

「なにを言う。妖精の粉が吹いているこの場所にいても俺は平気だ。衣服に付着しないことも確認しただろう。そのうえイチの値の四大元素も差し出したのだ。これ以上どんな証明がいるというのだ」

おお！ そうだそうだ！ それ以上の証明ないじゃん！

俺は心密かに男を応援した。だが長老は首を縦にふらず、カルテツトも沈黙しながら男を威嚇した。そして、

「それではエンブレムを見せていただきましょうか。なにぶん、これまで多くのニセモノもがやって来ては、あの手この手で我々を騙しにかかりました。簡単に認めるわけにはいかないのです」

と長老が言った。すると男はうなずき、ボトムスのポケットからあつさりとエンブレムを出した。紅い宝石が埋め込まれた手の平サイズの金のプレートである。長老はカルテツトと視線を交わし合った。それから男に向き直ると、ゆっくりうなずいた。

「いいでしょう。中へお入り下さい」

男と従者二人は、長老とカルテツトについて礼拝堂の中に消えた。それを見届けた街の住人は散らばりはじめ、急速に興奮から冷めた俺はポツンとたたずんだ。

あれ？ 本物が現れたってことは、俺の居場所なくね？

ひどくウツカリしていた。人の応援してる場合じゃない。どうしよう。どうする。どうすれば……どうしろっていうんだ。どうしようもないだろ。サ行変格活用は俺を助けてくれない。

部屋に置いている鞆のことも少し気になったが、取りに行く気にはならなかった。これって「いつも通り仕事に行って帰宅したら奥さんがいなくてダイニングテーブルに離婚届が置いてあった」くらいの衝撃だろうか。違うか。

俺は真面目に途方に暮れた。十数分くらいは、そこから動けなかったと思う。

が、やがてそつとその場から離れた。行く当てはない。だが仕方ない。ここで世話になる理由はなくなつたのだ。

以前クレイと歩いた通りを、今は一人で歩く。心細いことだ。しかも外に向かっていることが不安をかきたてる。

すっかりしろ、俺。本物が現れることを望んだのは誰だ。

鼓舞してみるも、揺れる心は抑えられなかった。知らない土地で無一文なのだ。行く末は知れている。ポケットにあるのは小さな巾着袋に入れた妖精の粉だけ。何故そんなものを持っているかという、何かの弾みで地球へ戻れた時に試してみたいことがあるからだ。

街の関所を抜けた頃には日が暮れはじめていた。まだオレンジ色を残す空に一番星が光っている。ヒューマン領土は一番星が光る方向にあると前にクレイに聞いた。俺はあくまでも地球人だが、ここではヒューマン??エレメンタルブレイカーという肩書きを失ったら本当にただのヒューマンだ。だからフェアリー自治区にはいられないだろうと思い、そこを目指すことにした。

道のりは九日から十日だろう。長老が王宮へ赴くためドルーバを使って往復した期間を考えればそんなもんだ。途中で川とかあったら充分に水分補給し、草の実でもなんでも食べられそうなものは食べよう。きつとなんとかなる。

ここまで思い至ればあとは勇氣と努力だ。がんばろう。クレイにお別れが言えなかったのは心残りだが、俺はもう振り向けない。一番星に向かって歩くだけで精一杯だ。薄情な俺を許してくれ。

俺は奥歯を噛み締め、ひたすら歩いた。立ち止まったら心が萎えそうだから、とにかく歩いた。疲れが出て眠気に襲われるまで歩き続けた。ひと眠りすればあつという間に朝が来て、また歩き出す勇氣が湧くだろうと思った。この先にどんなことが待ち受けているかなんて想像もできないままに……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5395u/>

ヒーローズ・エンブレム

2011年11月29日11時47分発行